

小中学校編

高知県授業づくり Basicガイドブック

～若年教員のための基礎・基本～



令和4年3月
高知県教育センター

はじめに

子どもたちが成人して活躍する頃の社会は、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化し、予測困難な時代を迎えると言われています。このような社会を生きていくには、高い志をもち、新たな価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が必要になります。学校教育では、子どもたちが、社会の変化に主体的に向き合い、他者と協働しながら、よりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくことができる力を育てていくことが求められます。

平成29年3月31日に公示された小・中学校学習指導要領には、「何を学ぶか」という学習の内容と、「どのように学ぶか」という学習の方法の両方を重視し、子どもたちの学びの過程を質的に高めていくこと、そして、学びの成果として「何ができるようになるか」という視点に軸を置いた授業改善に取り組んでいくことが明記されています。加えて、令和元年には児童生徒一人1台端末の環境を目指す「GIGAスクール構想」が示され、多様な子どもたちへの個別最適化された学びや、これからの未来を生き抜く子どもたちにとって必要な資質・能力の育成を確実にするための取組が求められています。

本冊子「高知県授業づくりBasicガイドブック～若年教員のための基礎・基本～」は、これからの時代を見据えた学習指導要領の理念を盛り込んで作成した同冊子（－平成29年度改訂版－）の内容を踏まえつつ、「GIGAスクール構想」におけるICT活用を加えた事例を新たに挙げて紹介することで、学習活動をより充実したものにし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善等をさらに活性化することを目的に編集したものです。そして、何より、教職員の大量採用時代を迎えている本県において喫緊の課題ともなっている、若い先生方の基礎的・基本的な授業力定着のための手引き書として作成しています。

具体的な授業の在り方は、子どもたちの発達段階や学習課題等により様々ですが、子どもたちにとって学びやすく、そして、「主体的・対話的で深い学び」に迫る授業を展開するには、どの教科等でも大切にしたい学び方や学習過程を充実させることが重要です。

本冊子で紹介している授業の流れや、そこでの子どもの学びを支える手立て等には、授業づくりの基本形として優れた実践に共通して見られる要素が含まれています。若い先生方には、まずはその基本形を徹底して実践し、身に付けていただきたいと思います。そして、教員としての経験を積み重ねていく中で、専門性を発揮し、さらなる学びの深まりを目指した授業づくりを追究していただくようお願いします。

先生方の不断の授業改善が、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習活動へと向かい、未来に羽ばたく子どもたちにとって「生きる力」を育てていく取組となるよう期待しています。

令和4年3月

高知県教育センター

目次

— はじめに —

「高知県授業づくりBasicガイドブック～若年教員のための基礎・基本～」について・・・ 3

第1章 目指す授業

1. 付けるべき力の育成を目指した授業を行うために	4
① 育成を目指す資質・能力の三つの柱	4
② これから求められる授業	5
③ 高知県の現状と課題	6
2. 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり	8
① 単元等のまとまりを見通した学びの実現	9
② 問題解決的な学習	11
③ 「見通し・振り返り」の学習活動	12
④ 言語環境の整備と言語活動の充実	14
⑤ 生徒指導の三機能を生かした授業づくり	15
⑥ ユニバーサルデザインに基づく授業づくり	16

第2章 付けるべき力の育成を目指した学習指導

1. 付けるべき力の育成を目指した学習指導の流れ	18
2. 学習指導の具体的な手立て	20
Ⅰ 見通し	20
Ⅱ 解決活動	26
Ⅲ まとめ	32
Ⅳ 振り返り	33
板書	34
ノートづくり	36
初任者の先生からよくある質問 Q&A	37
参考文献等	40

「高知県授業づくり Basic ガイドブック～若年教員のための基礎・基本～」について

作成の意図

高知県では、平成20年度以降教職員の退職者数の増加が始まり、それに伴って新規採用者も増加してきました。今後しばらく続くこの状況は、学校において経験の少ない若い教員の占める割合の増加につながることから、若年教員の確かな指導力定着を早期に実現することが喫緊の課題となっています。

加えて、全国学力・学習状況調査で明らかになった本県の児童生徒の学力の状況については、近年全体として改善傾向にあるものの、目的に応じて複数の情報から適切な情報を読み取り、それを根拠として原因や結果を説明したり、解決方法を構想したりすることには依然として課題が見られるなど、学習指導上の改善点が浮かび上がっています。その背景には、高知県教育委員会が設置した「教員の資質・指導力向上のための人材育成の在り方検討委員会」（平成25年2月）の報告にある「教員は経験則に依存した自己流の授業を実施しがちであり、学力の目標も個人によってばらつきがある」ことなども一因として考えられます。

このような現状を踏まえ、高知県教育委員会では子どもたちに確かな学力を育む授業力向上のための手引書として「授業づくりのスタンダード」（平成20年）を基に、平成26年度に「授業づくり Basic ガイドブック～若年教員のための基礎・基本（小中学校編）～」を作成し、授業改善への取組を強化しました。それを踏まえて平成28年度には全教職員が活用し、「チーム学校」として授業改善を図ることを目指した冊子として「Basicガイドブック」を改訂した後、平成29年度には、告示された新しい学習指導要領を盛り込んだ冊子として改訂し、県内全ての小中学校で「Basicガイドブック」の継続的な活用を進めてきました。その結果、多くの学校で授業改善が進んできましたが、まだまだ課題も残されており、若年教員の授業力・指導力の向上を始めとしたさらなる取組が求められます。

「高知県授業づくり Basic ガイドブック」を活用する先生方へ

本冊子は、若年教員や指導担当者に活用していただくために作成しています。具体的には次に示す①～③のような活用方法が考えられるので、有効に活用するようにお願いします。

- ①経験の少ない教員が、授業づくりや自己研鑽のための資料として日常的に活用する。
- ②配置校における「メンター制」の取組の中で、指導や学び合いのための「手引き書」として活用する。
- ③若年教員の育成や指導に関わる先生方が、具体的に有効な指導の手立てとして活用する。

本冊子で示しているのは、基礎的・基本的な授業づくりの一例です。授業では常に目の前の子どもたちの状況を把握し、「なぜ、何のためにこの活動や手立てが必要なのか」を考え、付けるべき力の育成を目指した授業づくりを工夫していきましょう。

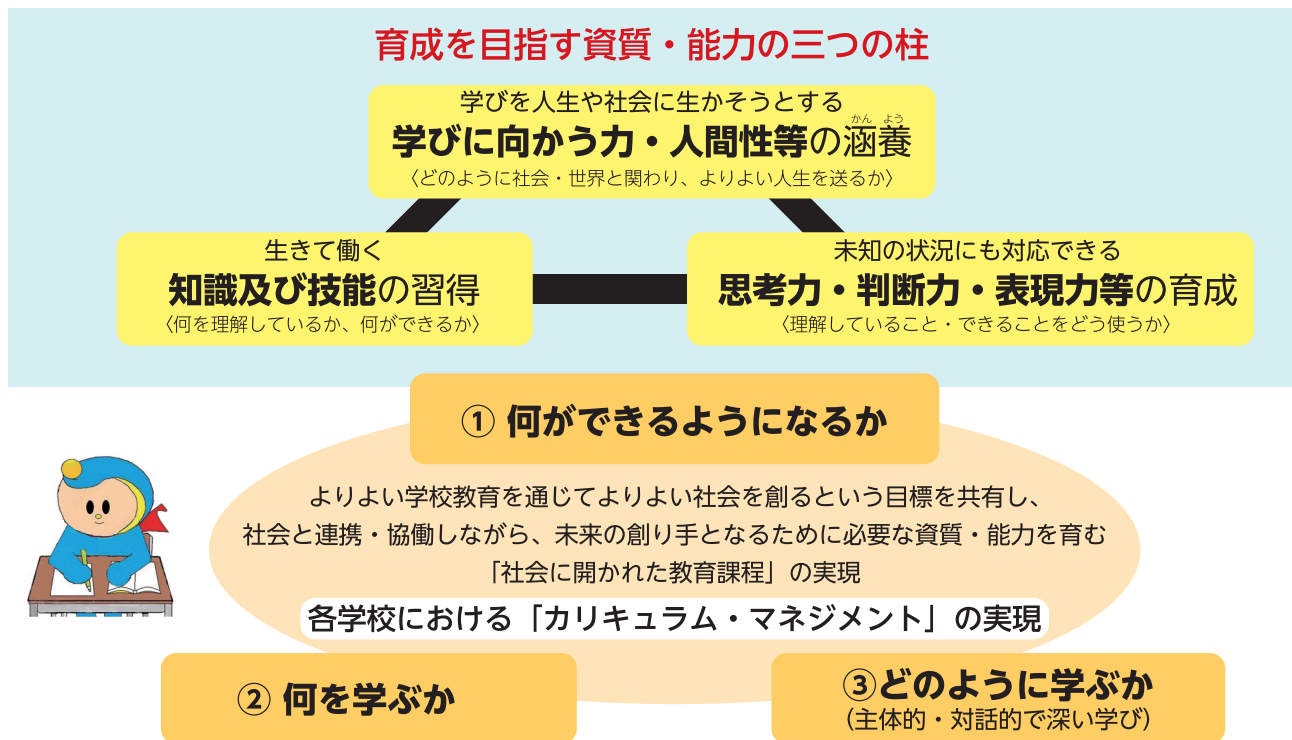
「高知県授業づくり Basic ガイドブック」の特徴

- 各校種・各教科等において「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、授業づくりの基礎・基本となる内容を「Basic」として示しています。また、1単位時間の授業改善と併せて、単元（題材）全体を見通した授業づくりについて、学習評価を含めて掲載しています。
- すべての子どもが、主体的・対話的に学習できるようにするための指導方法等の工夫を具体的な手立てとして画像に示し、提案しています。
- 「高知県教員育成指標」に基づき、「学習指導力」の領域に対する指導力向上を目指しています。

第1章 目指す授業

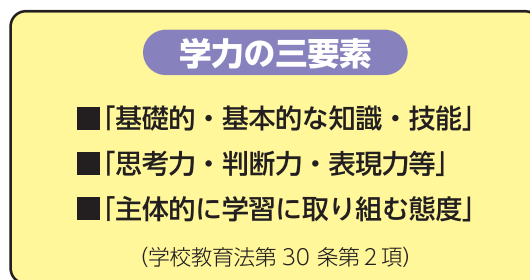
1. 付けるべき力の育成を目指した授業を行うために

① 育成を目指す資質・能力の三つの柱



学習指導要領では、特に、学ぶことと社会のつながりとを意識し、①「何ができるようになるか」という観点から育成を目指す資質・能力を整理し、その育成のために②「何を学ぶか」という必要な指導内容等を検討し、その内容を③「どのように学ぶか」という、子どもたちの具体的な学びの姿を考えながら授業を構成していくことが求められています。そして、教育課程全体を通して育成する資質・能力を三つの柱で示しています。これらの資質・能力は、これまでの学校教育で目指してきた「生きる力」をより具体化したものであり、また「学力の三要素」と対応しています。

このような資質・能力の育成には、**各教科等の枠組を踏まえた資質・能力、学習の基盤となる資質・能力、現代的な諸課題に対応していくための資質・能力等**を、学校教育全体を通じて育てていくことが重要です。



学習指導要領では、各学校の特色ある教育活動を展開する中で、「知・徳・体」のバランスのとれた「生きる力」の育成を目指すことが引き続き示されています。

2 これから求められる授業

子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要です。

そのため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められています。その際、各教科等における学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」です。

子どもたちが各教科等における「見方・考え方」を働かせながら課題解決に向かう学習過程の改善を図ることで、より質の高い深い学びにつなげ、資質・能力の育成を図っていきましょう。

【主体的な学び】

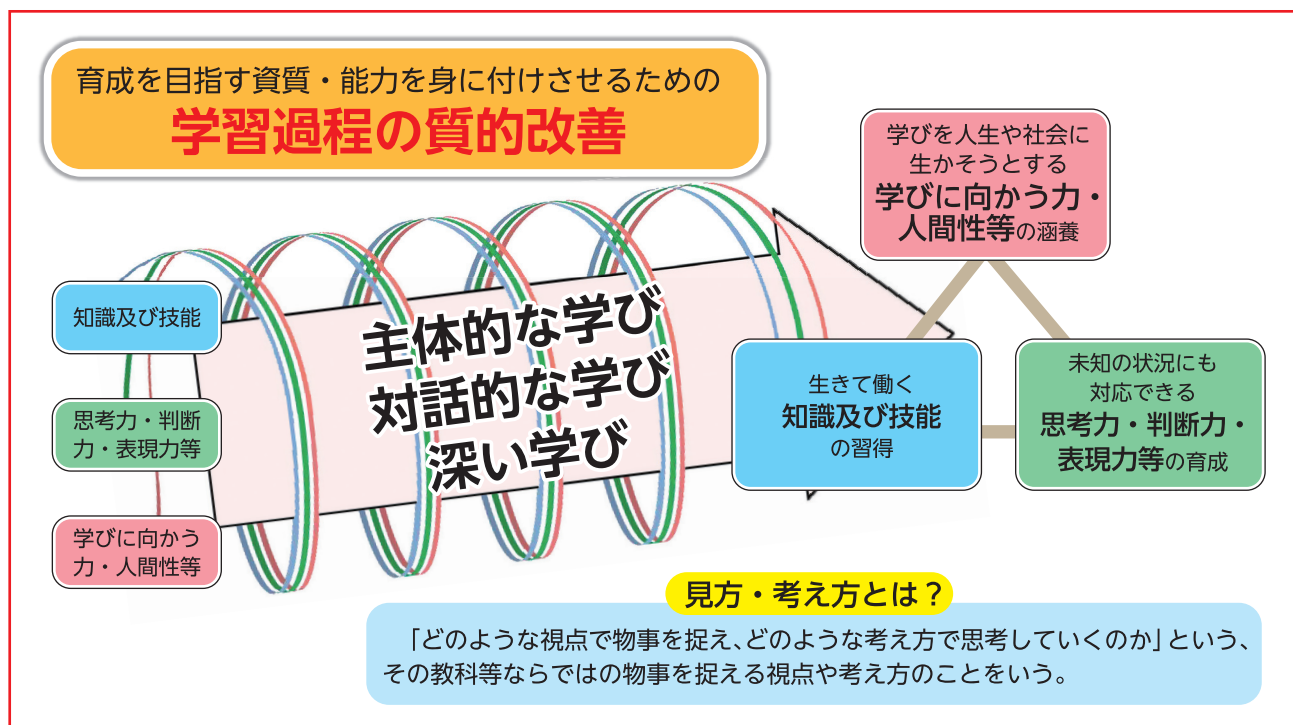
学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び

【対話的な学び】

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び

【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び



3 高知県の現状と課題

取組

本県では、令和3年に教育等の振興に向けた目標や取組の方向等を定めた「第2期教育等の振興に関する施策の大綱」（改訂版）を策定するとともに、この大綱の内容を踏まえ、より具体的な事業等を盛り込んだ「第3期高知県教育振興基本計画」を策定し、教育課題の解決に向けた取組を進めています。



学力の現状と課題

<小・中・高等学校の学力>

本県の小・中学校の児童生徒の学力の状況は、全国学力・学習状況調査が始まった平成19年度からの経年でみると、全体的に改善傾向が続いています。令和3年度の調査結果では、小学校は引き続き全国上位に位置しており、中学校はまだ全国平均には達していないものの、国語・数学ともに全国平均に近づきつつあります。また、高等学校の学力定着把握検査の結果では、学習内容が十分定着しておらず、進学や就職の際に困難が生じることが予測される生徒（D3層）の割合は減少傾向にあるものの、依然として厳しい状況です。

子どもたちに確かな学力を育むためには、現状をしっかりと把握するとともに、これからの時代に求められる資質・能力とはどのようなものであるかを十分に理解し、そのような力を子どもたちに育成する授業づくりを進めていく必要があります。



授業の現状と課題

本県では、授業改善に向けた様々な取組を進めてきましたが、まだ、授業における次のような課題が見られます。

- 教員の経験則に依存した授業で、子どもが主体的に学べていない授業
(自己流、教員主導、一問一答型授業 等)
- 子どもが、「何をどのように学習するのか」の見通しをもてない授業や、「振り返り」がなく、学びの実感がもてない授業
- 教員が一方的に話すことが多く、子どもが考えたり話し合ったりする時間が少ない授業
- 一部の子ども意見だけで進み、学習に参加できていない子どもが見られる授業
- 担任や教科によって授業の流れや学習の仕方が大きく異なり、子どもが学びにくさを感じている授業
- 活動はあるが、ねらいに沿った学びのない授業



あなたは、このような授業を行っていませんか？



よい授業とは？

よい授業には、校種や教科に関わらず、次のような普遍的な要素があります。このような授業を実現し、子どもたちに確かな学力を育むことが教員の使命です。

- *子どもが主体となる授業（全員参加）
- *単元や1単位時間において付けるべき資質・能力（ねらい）が明確な授業
- *子どもが見通しをもち、「何を」「どのように」学ぶのが分かる授業
- *友達と学び合うことで、自分の考えが広がったり深まったりする授業
- *子どもが、「分かった!」「できた!」という達成感を得られる授業 等



よい授業を目指して！

日々の授業において、どの教科等でも大事にしたい学び方や学習過程を校内で統一し、教科横断的な指導を行うことで、子どもにとって、見通しをもち、主体的に学びやすい環境が構築されるようになります。また、子どもが学び方を身に付けていくこともできます。このことは、学習指導要領における「どのように学ぶか」という学習過程の質的改善と関係しており、各教科等で育成を目指す資質・能力やあらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力の育成にもつながります。

また、子どもが、課題解決に向かって見通しをもちながら取り組み、友達との対話等を通して考えを深め合う授業では、「見方・考え方」が深まり、「知識・技能」をより確かなものとします。

「子どもが受動的になりやすい授業」から、「子どもが能動的になる授業」へと転換を図ることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指していきましょう。

【子どもが受動的になりやすい授業】

教員からの話を聞くことが中心となり、じっくりと考えたり、他者と対話したり、表現したりするなどの活動がない授業



【子どもが能動的になる授業】

今日の授業で、何を、何のために行うのかの見通しをもち、考え、話し合い、考えを深化・統合し、まとめ・振り返るなどの学習を行う授業

「主体的・対話的で深い学び」の実現 … 校内で共有し、取り組んでいく必要があります。

2. 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり

本冊子では、授業改善の視点として、以下の6つの柱に基づいた授業づくりを提案しています。これらは、どの教科等にも共通した授業づくりの基礎・基本（Basic）であり、すべての子どもが主体的・対話的に学ぶことができるようにするためのベースとなるものです。学校全体で取り組み、さらなる授業改善を進めていきましょう。

授業づくりの基礎・基本（Basic）

1 単元等のまとまりを見通した学びの実現 P9へ

2 問題解決的な学習 P11へ

3 「見通し・振り返り」の学習活動 P12へ

4 言語環境の整備と言語活動の充実 P14へ

5 生徒指導の三機能を生かした授業づくり P15へ

6 ユニバーサルデザインに基づく授業づくり P16へ

各項目について、次ページから説明しています

1 単元等のまとまりを見通した学びの実現

子どもたちに付けるべき資質・能力を確実に育むためには、1 単位時間の授業のみでなく、単元等のまとまりを見通した計画的な指導を行うことが大切です。

そのために、年間指導計画を基に単元の指導計画を構想し、P D C A サイクルを意識した授業実践を行いましょう。

授業実践の流れ



「主体的・対話的で深い学び」は、1 単位時間の授業の中ですべての学びが実現されるものではありません。単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、次のような場面を計画的に設定し、実現を図っていくことが大切です。

- ★主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面
- ★対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面
- ★子どもが考える場面と教員が教える場面（学びの深まりをつくり出す）

ピンクの項目はP.9「単元の指導計画」と対応しています。

単元のまとまりを見通して「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る単元（題材）づくりの一例

【単元名】 四角形と三角形の面積（小学校 算数科 第5学年「B 図形」(3)「平面図形の面積」）
【単元目標】

- (1) 三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積の計算による求め方を理解し、それらの面積を公式を用いて求めることができる。
- (2) 図形を構成する要素などに着目して、求積可能な図形に帰着させ、基本図形の面積の求め方を見いだすとともに、その表現を振り返り、簡潔かつ確かな表現に高め、公式として導くことができる。
- (3) 求積可能な図形に帰着させて考えると面積を求めることができるというよさに気づき、三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積を求めようとして、見いだした求積方法や式表現を振り返り、簡潔かつ確かな表現に高めようとしてしている。

本単元の位置づけの確認

学習指導要領の確認

教材分析

子どもの実態把握

単元目標の設定

具体的な指導・支援の構想

他教科との関連

数学的な見方・考え方の把握

数学的活動の位置付け

言語活動の充実

実生活との関連

指導と評価の計画

目指す子どもの姿

次	主な学習活動(例)	主体的・対話的で深い学びの姿(例)	評価規準(評価方法)例
1次	【単元全体の見通し】 ◆求積可能な図形の面積の求め方を基に、三角形や平行四辺形等の未習の面積を求めることができないか、問題解決に向けた見通しをもつ。	平行四辺形の面積を求めるには、長方形の面積の求め方が使えそうだな。 見通しをもつ	知識・技能 思考・判断・表現 主体的に学習に取り組む態度
			・知② (ノート分析、行動観察) ・思② (ノート分析、行動観察) ・態② (ノート分析、行動観察)
2次	【各時間における解決活動】 ◆三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積の求め方について既習事項を基に考え、説明する。 ＊可視化した互いの考えを比較したり、関連付けたりしながら、対話をする。 ＊数学的な見方・考え方を働かせることで、等積変形、倍積変形、分割といった考えを導いていく。 ◆三角形、平行四辺形、ひし形、台形の面積の求め方の表現を振り返り、簡潔かつ確かな表現に高め、公式を導き、公式を基に面積を求める。	三角形の面積も平行四辺形のように長方形に形を変えるとよさそうだな。他の形には変えられないかな。 見通しをもつ 興味や関心を高める	・知① (ノート分析) ・思① (ノート分析、行動観察)
		みんなが考えたどの式にも「÷2」が入っているよ。 互いの考えを比較する	・知② (ノート分析) ・思② (ノート分析、行動観察)
		台形もいろいろな形に変えることができたね。三角形に変える方法は、どんな台形でも使えそうだね。みんなの考え方で出てくる数字は、どこの長さになるのかな。これまでと同じように公式がつかれるかな。 思考して問い続ける 新たなものを創り上げる	・知① (ノート分析、行動観察) ・思① (ノート分析、行動観察)
3次	【単元全体の振り返り】 ◆公式の理解を深め、図形の求積において活用するとともに、単元全体の学びを振り返る。	他の図形の面積も、いろいろな形に変えると、公式を使って求められないかな？ 知識・技能を概念化する	○思① (ノート分析、行動観察) ○態① (ノート分析、行動観察)

指導に生かす評価を行う代表的な機会については「・」を付けています。

総括の資料にするために記録に残す評価を行う機会には「○」を付けています。

【学習評価】
 国立教育政策研究所発行の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参考に評価の計画を立てましょう。
 教科によって表記の仕方は異なります。

- ◆形の特徴に注目して未習の図形を等積変形したり、倍積変形してその半分としたり、分割したりと既習の図形に変えて面積を求めることができる。
- ◆操作活動を通して考えた自分の考えを言葉・数・式・図と関連付けて説明し、表現している。
- ◆複数の求積方法に共通していることや求積に必要な部分の長さに注目して簡潔な解決方法を見だし、面積の求め方や公式を導いている。

【指導と評価の一体化】

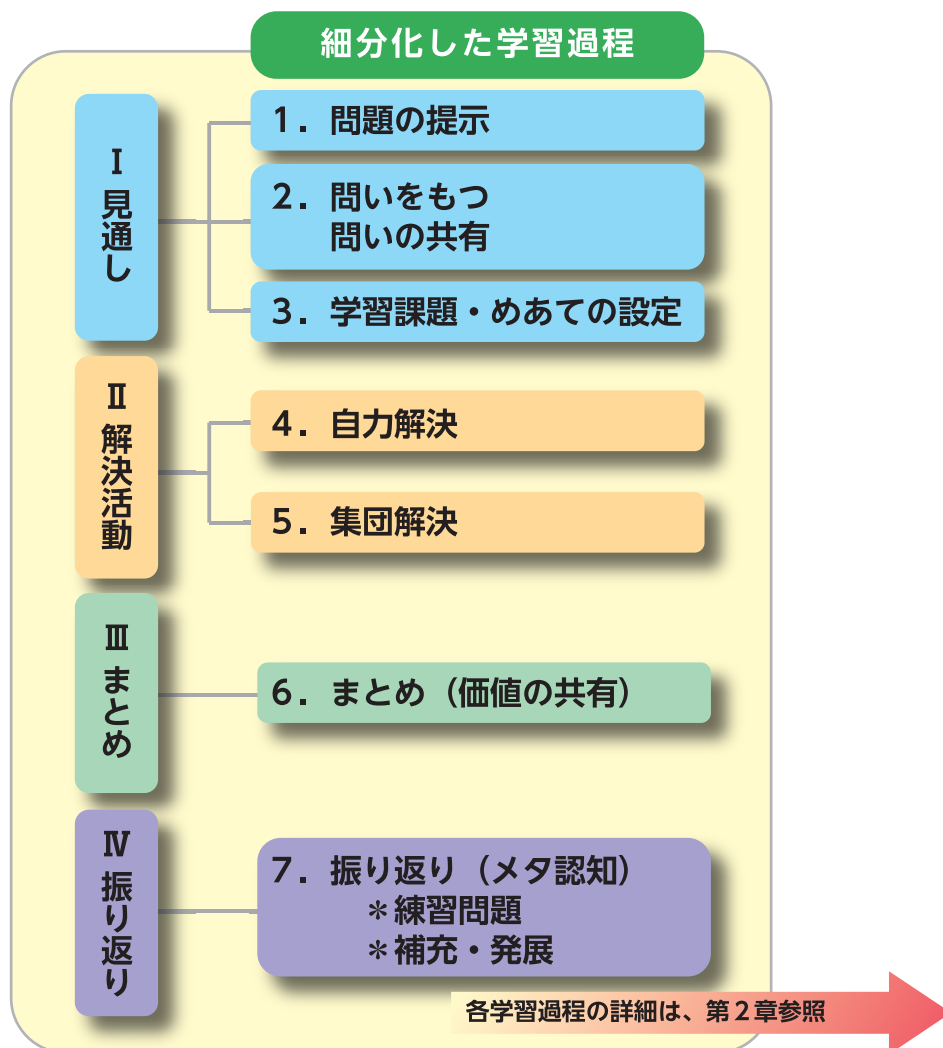
- ・評価での見取りを子どもの学習や教員の指導改善に生かしていくことが大切です。
- ・ペーパーテストの結果だけでなく、学習の過程を一層重視し、グループでの話し合いや作品の表現等の多様な活動、ポートフォリオ等を通じ、多面的・多角的な評価をしましょう。
- ・B（おおむね満足できる状況）の子どもの様子を具体的に描き、C（努力を要する状況）の子どもへの手立てを考えておきましょう。

2 問題解決的な学習

学習指導要領の総則では、学習の基盤となる資質・能力の一つとして「問題発見・解決能力」があげられ、次のように示されています。

◆各教科等において、物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現を図ることを通じて、各教科等のそれぞれの分野における問題の発見・解決に必要な力を身に付けられるようにする…

本冊子では、「問題発見・解決能力」の育成を目指し、「問題解決的な学習」を取り入れた学習過程を提案しています。そして、1単位時間の学習過程を細分化し、7段階の学習過程で構成しています。学習過程を細分化し学習活動を明確にすることで、子どもが見通しをもちながら主体的に学習を進めることができるようになるとともに、教員がより細かな支援や手立てを行うことができるようになります。このような学習過程を参考にし、授業のねらいに応じた学習活動を工夫することが大切です。



発達段階や教材、授業のねらい等によっては、必ずしもこの流れになるとは限りません。それぞれの学習活動の意図を明確にし、仕組んでいくことが重要です。

授業のねらいにより、1単位時間における中心活動となる場所も変わってきます。単元における本時の位置付けを考え、授業のねらいに応じた適切な時間配分で授業を構成しましょう。

3 「見通し・振り返り」の学習活動

「見通し・振り返り」の学習活動の重要性

「主体的な学び」の実現に向けた授業改善を進めるに当たっては、子どもが学ぶことに興味や関心を持ち、**見通しをもって粘り強く取り組むこと、自己の学習活動を振り返って次につなげる**ことなどが重要であり、学習指導要領の解説「総則編」においてもその重要性が述べられています。

「見通し・振り返り」の学習活動を充実させることで、学習内容の確実な定着が図られ、各教科等で目指す資質・能力の育成にもつながります。



「見通し・振り返り」の学習活動のポイント

見通し

本時の学習や自力解決への見通しを立てられるよう、「学習課題・めあて」をしっかりと把握させましょう。

- * 「学習課題・めあて」を達成するには「何を」、「どのように」すればよいのか、**問題解決の方法や調べる視点等**を個人やグループで考えさせましょう。
- * 全員が自力解決の見通しをもっているのかを確認しましょう。見通しをもていない子どもがいる場合には、前時までのノートで振り返らせたり、教え合いの時間を設けたりする等の手立てを行い、全員が自力解決に向かえるようにしましょう。

P20 参照

振り返り

授業で「何を学んだのか」、「どのような力が身に付いたのか」など、自己の変容や深まりを自覚（メタ認知）することで充実感が得られ、次時への学習意欲が高まるとともに、学習内容の定着を図ることができるようになります。

- * 学びをメタ認知できる**視点等を意図的に示**しましょう。
- * 振り返りの時間がなくなってしまうことがないよう、各学習活動に応じた適切な時間配分を計画しておきましょう。（学習活動における子どもの姿を具体的にイメージしておく）
- * 振り返りを基に子どもの学びの状況を把握し、事後指導に生かしたり、次の学習につなげたりしましょう。
- * 練習問題や補充・発展問題等と併せて振り返りをさせることもあります。

P33 参照



授業における「見通し・振り返り」の学習活動を適切に設定することで、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることができ、主体的に学習に取り組む態度を養うことにつながります。

「見通し・振り返り」の学習活動のカギは「学習課題・めあて」

「見通し・振り返り」の学習活動を充実させるためには、「**学習課題・めあて**」の設定が重要になります。

各学校では、「学習課題・めあて」について様々な用語で表現されていますが、本冊子では、以下のように整理しています。

学習課題 めあて

1 単位時間で何ができるようになればよいのか、何が分かればよいのかといった、本時のゴールに向けて考える視点や取り組む視点を子どもにはっきり分かるよう具体的に表現した本時の課題で、**子ども側の視点**で捉えたもの

また、適切な「学習課題・めあて」を設定するためには、教員側のねらいを明確にしておくことが重要です。

ねらい

学習指導要領の各教科等の目標及び内容に基づき、子どもや学校の実態に即して教員が設定する単元や1 単位時間の指導目標で、**教員側の視点**で捉えたもの

* 「ねらい」を明確にするためには、学習指導要領をしっかりと読み込んで各教科等の目標や内容を理解することが大切です。



「学習課題・めあて」設定のポイント

子どもが「学習課題・めあて」を設定する場合

考える視点や取り組む視点をもてるような問題提示によって、子どもの「**問い**」(驚き・疑問等)を引き出し、「学習課題・めあて」の設定につなげていきましょう。

- 「問い」を引き出す「**資料の提示**」や「**活動の工夫**」
- 「問い」を「学習課題・めあて」の設定につなげる「**発問**」の工夫
- 子どもから出た言葉を**教員が整理し**「学習課題・めあて」を設定する 等

教員が「学習課題・めあて」を設定する場合

学習内容やねらいによって、教員が「学習課題・めあて」を提示することもあります。その際にも、子どもが自分たちの「学習課題・めあて」として捉え、「**何を学ぶか**」、「**何ができるようにするか**」を意識できるようにしましょう。

- 既習事項を想起させる
- 子どもの興味・関心をひくような発問を工夫する
- 単元全体の学習の見通しを示す 等

「学習課題・めあて」に必要な条件

- ★ 本時に付けるべき資質・能力(ねらい)に迫るもの
- ★ 多様な考えを引き出すことができるもの
- ★ 子どもの実態を踏まえており、意欲を高めるようなもの
- ★ 子どもにとって考える必要性があるもの
- ★ 子どもがゴールイメージをもてる、分かりやすい具体的なもの

* 教員が、めあてを達成した子どもの姿(何が、どのようにできていけばよいのか)を明確に捉えておくことが重要!!

4 言語環境の整備と言語活動の充実

学習の基盤となる言語能力の育成

言語能力は全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものであり、教育課程全体を通じて育成を図っていくことが重要です。


言語能力の育成を図るために、各学校においては、①学校生活全体における言語環境を望ましい状態に整えておくこと、②中核的な教科である国語科を要として、各教科等の特質に応じた言語活動の充実を図ること、③読書を通じて、多くの語彙や多様な表現、新たな考え方等に出会うことができるよう、読書活動の充実等に取り組むこと等が大切です。

各学校の実情に応じてこれらの活動を充実させ、子どもたちの確かな言語能力の育成を図りましょう。

学習の基盤となる言語能力の育成


①言語環境の整備

- 正しい言葉で話し、正確で丁寧な文字を書く
- 校内の掲示板、子どもへの配付物等において、用語や文字を適正に使用する
- 校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話す
- 子どもが集団の中で安心して話ができる、好ましい人間関係を築く 等



②言語活動の充実


- 言語能力を育成する中核的な教科である国語科を要として各教科等において言語活動の充実を図る



③読書活動の充実

- 学校図書館等の計画的な利用
- *目的をもって計画的に利用しその機能の活用を図る

- ・「読書センター」として読書活動、読書指導
- ・「学習センター」として学習活動の支援、学習内容の理解を深める
- ・「情報センター」として情報の収集、選択、活用能力の育成



国語科と他教科等の言語活動の関連

学習指導要領解説国語編では、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力をどのような言語活動を通して育成するかを言語活動例として示しています。また、他教科等においても、教科の特質に応じた言語活動が位置付けられており、国語科との関連を図りながら教科横断的に取り組んでいくことが大切です。例えば、「説明」という言語活動は、社会科、算数・数学科、理科等でも重視されており、各教科等で繰り返し行うことで、自分の考え等をまとめて適切に説明するという能力が高まっていきます。

このように、国語科を要として各教科等において計画的・継続的に言語活動の充実を図り、子どもたちの確かな言語能力の育成を目指していきましょう。

国語科の言語活動例

紹介	説明
報告	記録
質問	感想
手紙	提案
日記	案内
話し合い	など

教科横断的に取り組んでいく（学習指導要領に示された例）

社会科

社会的事象の特色や意味、社会に見られる課題などについて、多角的に考えたことや選択・判断したことを論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなど言語活動に関わる学習を一層重視すること

理科

問題を見だし、予想や仮説、観察、実験などの方法について考えたり説明したりする学習活動、観察、実験の結果を整理し考察する学習活動、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりする学習活動などを重視することによって、言語活動が充実するようにすること

算数科

思考力、判断力、表現力等を育成するため、各学年の内容の指導に当たっては、具体物、図、言葉、数、式、表、グラフなどを用いて考えたり、説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったり、学び合ったり、高め合ったりするなどの学習活動を積極的に取り入れるようにすること

家庭科

衣食住など生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する学習活動や、自分の生活における課題を解決するために言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり、説明したりするなどの学習活動の充実を図ること

5 生徒指導の三機能を生かした授業づくり

「生徒指導提要」（文部科学省 平成22年）において、生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めていく教育活動を通して、自己指導能力を育成することである」と示されています。さらに、児童生徒にとって、学校生活の中心は授業であり、毎日の教科指導において自己指導能力の育成につながる生徒指導の機能を発揮させることは、生徒指導上の課題を解決することにとどまらず、学力向上にもつながるとしています。

「生徒指導の三機能を生かした授業づくり」は、「教科の学習指導を展開する場で、教科のねらいを達成しながら、生徒指導を機能させる」ということで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりと重なるものであり、児童生徒と教員の関わり、児童生徒同士の関わりを大切にした授業につながります。（「生徒指導ハンドブック」P19～22、「開発的・予防的な生徒指導 実践事例集」P18～19参照）

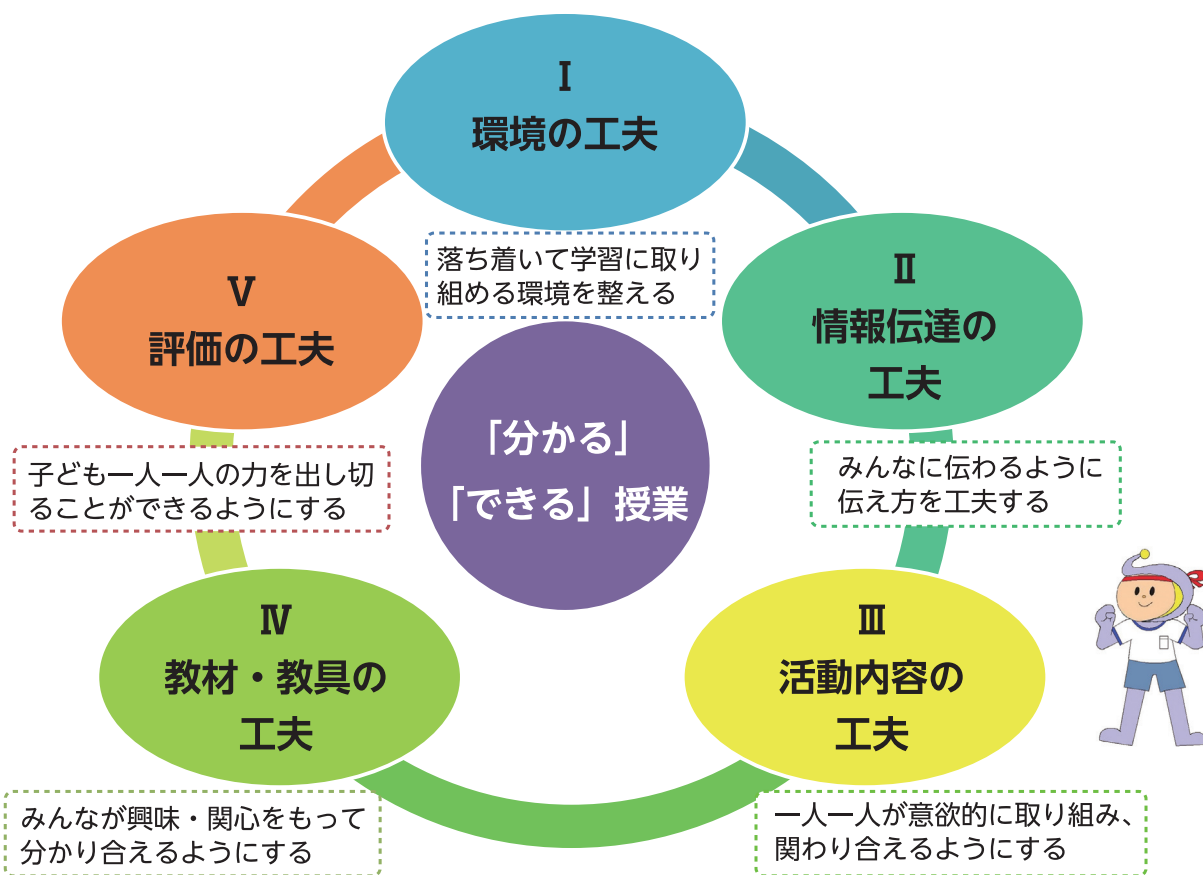
生徒指導の三機能	目指す児童生徒の姿	三機能を生かす手立て
自己決定の場を与える	課題解決に向けて、自ら進んで活動し、自ら考え、判断した過程や結果について、自分の言葉で表現できる	<ul style="list-style-type: none"> ・何をどのように考え、まとめたらいかなどの視点や方法を分かりやすく示す。 ・発表や意見交流の前に一人で調べたり、考えたりする時間を確保する。 ・思考の過程や課題解決の過程が分かるようなノートの書き方を指導する。 ・学習の振り返りをさせ、理解できたこと、疑問に思うことを明確にさせる。 ・多様な意見を生むような発問の工夫をする。
自己存在感を与える	課題解決の場で、自分の果たすべきことや役割を自覚し、仲間と話し合い協力しながら、自分の良さや力を発揮することができる	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が自分の良さを生かしながら、活躍できる場を設定する。 ・児童生徒が協力して学習できるように、ペア学習やグループ活動などを取り入れる。 ・ペアやグループで協力しなければ解決できない学習課題を設定する。 ・授業に意欲を見せない児童生徒や学力に課題を抱える児童生徒にも、学習に向かえる配慮をする。 ・うなずいたり、褒めたりしながら、個に応じた評価、励ましを具体的に示す。
共感的な人間関係を育む	自分の考えや思い、判断を表現するとともに、互いの考えや意見を肯定的に認め合い、学び合うことができる	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の発表に対して、うなずきや相づちで応えたり、拍手をしたりするような共感的な雰囲気づくりを行う。 ・児童生徒一人一人を受け入れて褒め、生徒の人間性を認めながら指導する。 ・相互評価など、互いの良さを認め合う活動を取り入れる。 ・児童生徒同士の発言をつなげ、集団での学び合いを意図的に設定する。 ・児童生徒の学び合い、教え合いを大切にし、教師主導にならないよう配慮する。

6 ユニバーサルデザインに基づく授業づくり

ユニバーサルデザインに基づいた授業とは、障害のある人にとっても、障害のない人にとっても学びやすく、分かりやすい授業づくりを目指すことを意味します。

子ども一人一人の多様性と向き合いながら一つのチームとして子ども達の学びを高め、充実させていくことが重要になります。そのためには、発達障害等のある子どもを含め、すべての子どもが安心して過ごせるよう環境を整え、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりを目指しましょう。

ユニバーサルデザインに基づく授業のポイント



【ユニバーサルデザインに基づく「分かる・できる授業」】

実際の支援を考える際には、上記のポイントを組み合わせを行い、授業の「学習課題・めあて」や内容が子どもに伝わるようにすることが大切です。教員から子どもへの伝え方や子どもが自分の意見を教員へ伝えるための工夫、子ども自身が解決したり、子ども同士が学び合ったりできるような工夫を活動に取り入れることも重要になります。

【教員⇒子ども】

分かりやすく提示したり、伝えたりするための工夫

【子ども⇒教員】 【子ども⇔子ども】

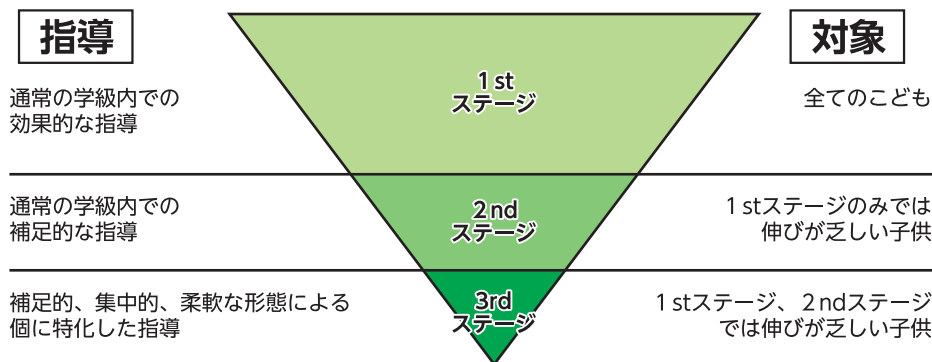
授業に意欲的に参加したり、自分の意思を伝えたりするための工夫

【子ども⇔子ども】 【子ども自身で】

自分の力で課題を解決したり、自己評価したりするための工夫

授業づくりでは、子ども一人一人の興味や関心、発達や学習の課題等を踏まえ、それぞれの個性に応じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めていくことが必要です。発達障害をはじめ様々な困難のある子どもたちの特性を踏まえ、授業において支援を行うには、「個に応じた指導」を大切にしつつ、一斉授業で工夫や配慮を実施していくという視点も重要になります。

通常の学級における学習のつまずきのある子どもへの支援の在り方として、多層指導モデル（MIM）が参考になります。これは、異なる学力層の子どものニーズに対応した指導・支援を提供するモデルであり、特に子どもが学習につまずく前に、また、つまずきが重篤化する前に指導・支援を行うことを目指します。



引用文献
「通常の学級における学習につまずきのある子どもへの多層指導モデル（MIM）開発に関する研究」
海津他（2008）



すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック【改訂版】

高知県教育委員会では、「すべての子どもが『分かる』『できる』授業づくりガイドブック【改訂版】」を作成しています。このガイドブックに示すユニバーサルデザインに基づく授業づくりは、多層指導モデルのおもに1stステージで行う支援と捉えます。すべての子どもたちに必要な指導・支援のイメージを共通にもち、チームでの支援としてつなげていきましょう。

～ユニバーサルデザインに基づく授業づくりの具体例～

I 環境の工夫



ファイルを班別、教科別に整理したり、道具の片付け場所を決めたりと必要なものが一目で分かるような工夫をしています。

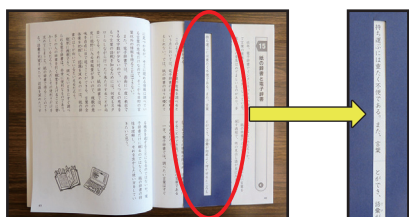


Ⅲ 活動内容の工夫



授業の流れを視覚的に提示したり、終わりが分かるようタイマーを使用したりして見通しがもてるようにしています。

Ⅳ 教材・教具の工夫



色画用紙等を切り抜いたものを使って、音読している行に注目できるようにしています。







気持ちの表出が苦手な場合、感情を視覚化・数値化したり、肯定的な言葉を提示したりして、自分の気持ちに気付けるようにしています。



第2章 付けるべき力の育成を目指した学習指導

1. 付けるべき力の育成を目指した学習指導の流れ

学習過程	細分化した学習過程	児童・生徒の姿
I 見通し	■前時の振り返り	<p>本時の「学習課題・めあて」をしっかりとつかみ、課題解決への見通しをもっている。</p> 
	1. 問題の提示	
	2. 問いをもつ 問いの共有	
	3. 学習課題・めあての設定	
	■学習の流れの確認	
II 解決活動	4. 自力解決	<p>課題解決に向かい、意欲的に取り組み、自分の考えをもっている。</p> 
	5. 集団解決	<p>仲間との対話等を通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。</p> 
	<ul style="list-style-type: none"> ■ペア・グループ活動 ■全体での練り上げ（考察） ■教員による修正 	
III まとめ	6. まとめ（価値の共有）	<p>本時の学習課題（めあて）を達成し、学習内容が定着している。</p> 
IV 振り返り	7. 振り返り（メタ認知）	<p>本時の学習課題（めあて）に対し、自分の学習の高まりやその要因を確認している。</p>

子どもが主体的・対話的で深い学びに向かうことができる授業づくりを目指し、1単位時間における問題解決的な学習の基本的な授業の流れを下記のように整理しています。学習過程におけるポイントを参考に、授業では、その時々の子どもの学習状況に応じた適切な指導や手立てを行いましょう。なお、発達段階や教科、授業のねらい等によっては、必ずしもこの流れになるとは限りません。

ポイント	該当ページ
<input type="checkbox"/> ノートや掲示物等を用いてこれまでの学習を振り返る <input type="checkbox"/> 単元における本時の位置付けを確認する	P20
<input type="checkbox"/> 子どもが問いをもてるような問題を提示する <input type="checkbox"/> 提示の仕方を工夫する	P21
<input type="checkbox"/> はじめに個人で問題を確認させる <input type="checkbox"/> 教科等に応じた問いをもつ視点を示す <input type="checkbox"/> 全員が解決への見通しをもつことができるようにする	P22 23
<input type="checkbox"/> ねらいを達成した子どもの姿をイメージする <input type="checkbox"/> 子どもが「何を学ぶのか」を明確に把握できるようにする <input type="checkbox"/> 全員が自力解決の見通しをもつことができているかを確認する	P24 25
<input type="checkbox"/> 思考の時間を十分確保する <input type="checkbox"/> 考えの根拠や理由を書かせる <input type="checkbox"/> 本時のねらいを意識し、机間指導で個と全体の状況を見取る <input type="checkbox"/> 赤ペンを持って回り、称賛やアドバイスを <input type="checkbox"/> 分からない子どもがいる場合は、教え合う場を設定する	P26 27
<input type="checkbox"/> 聞き手の方を向いて自分の考えを伝え合わせる <input type="checkbox"/> 友達考えの良さを認めたりアドバイスをしたりする場を設定する <input type="checkbox"/> 友達考えを記録させる（自分とは違った考え等）	P28
<input type="checkbox"/> 必要に応じて司会者や記録者等の役割を決める <input type="checkbox"/> 話し合いの目的と手順を明確に伝える <input type="checkbox"/> ホワイトボードや思考ツールで意見を可視化する	P28 29
<input type="checkbox"/> 発表の仕方や聞き方を指導する <input type="checkbox"/> 子どもの意見を構造化しながら板書する	P30 31
<input type="checkbox"/> 意見の整理や修正を行う	P30
<input type="checkbox"/> 子どもの言葉でまとめる <input type="checkbox"/> キーワードを使ってまとめる <input type="checkbox"/> 本時の学習課題（めあて）との整合性を図る（まとめの書き出しの言葉を示しておく）	P32
<input type="checkbox"/> 視点を示して振り返らせる <input type="checkbox"/> 全員が「何を学んだのか」認識できるようにする	P33

2. 学習指導の具体的な手立て

ここでは、それぞれの学習過程における具体的な活動や手立て等について示しています。

それぞれの活動や手立ての目的・意図（なぜ、何のために必要なのか）を考えながら、ねらいに応じて取り入れてください。

I 見通し

■前時の振り返り

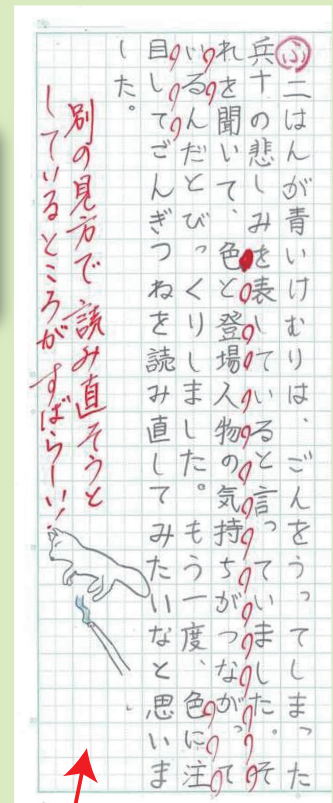
●子どもが、単元における学びのつながりを意識して学習に向かうために、本時の問題提示の前に、必要に応じて前時の振り返りを行います。

- ・ノートに記述した内容や掲示物を使って、これまでの学習を振り返らせ、本時の「学習課題・めあて」の設定につなげていきます。前時の学習と本時の学習とのつながりを意識することができると、主体的に本時の学習に向かえるようになります。

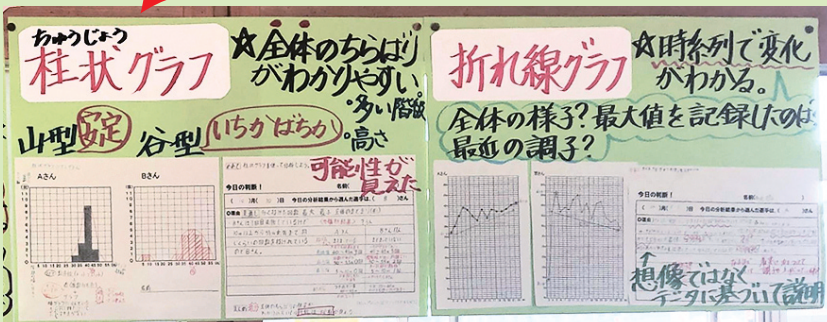


ノートやタブレット端末を活用し、ペアで読み合ったり、前時の学習内容を確認したりしています。

子どものノートやプリントを貼り、毎時間の学習の足跡を残し、前時に学習したことを想起しやすくしています。



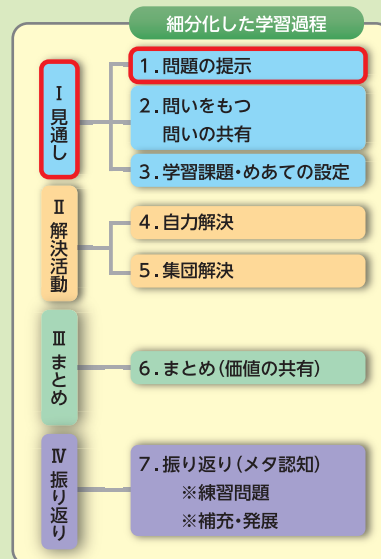
子どものノートの振り返りから個々の学びを見取することで、次時の授業で活用することができます。



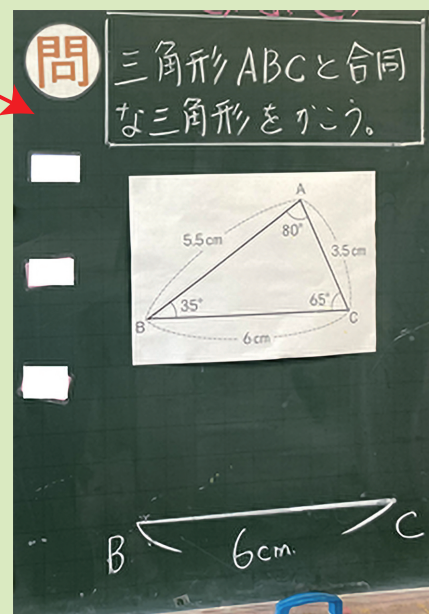
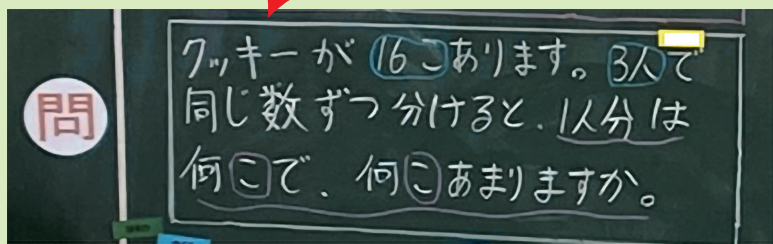
1. 問題の提示

●本時の学習問題を提示します。

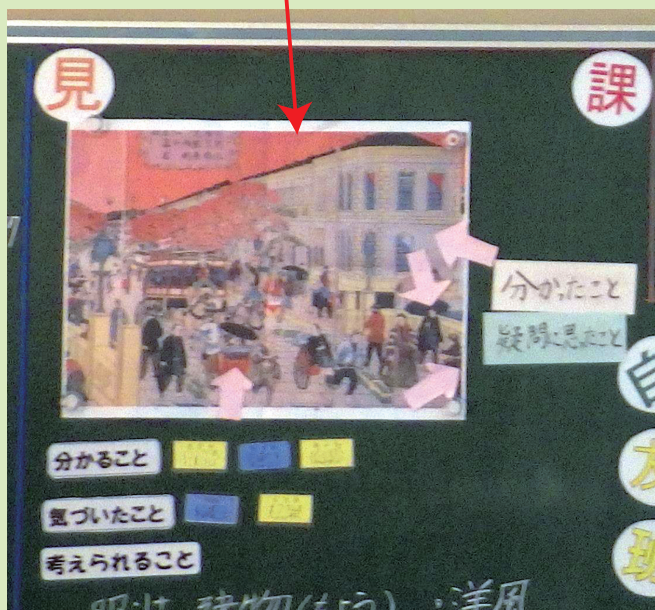
- ・「前時の振り返り」等を生かしながら、本時のねらいに迫ることができるような問題を提示します。
- ・教科書の問題、写真やグラフ等の資料、演示実験、ICT機器の活用など、教科や学習内容によって、提示する問題の内容や提示の仕方は様々です。子どもにとって身近で分かりやすい問題や既習事項とのズレがある問題を提示すると効果的です。
- ・子どもが主体的に「学習課題・めあて」の設定ができるようにするために、問い（驚き・疑問・既習事項との違い等）を引き出す問題を提示します。



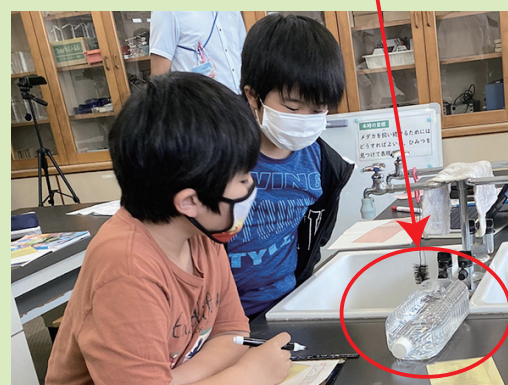
教科書の問題



資料による問題提示



実物を使った問題提示



2. 問いをもつ 問いの共有

- 「問いをもつ」とは、提示された問題を受けて、各自が問題に対する「気づきや疑問」等をもったり、「分かっていること」、「問われていること」等を理解したりすることです。
 - ・ 一人一人の子どもに問いをもたせることで、この後の学習活動に主体的に取り組むことができるようになります。
 - ・ 発達段階に応じて、既習事項との相違点などを確認させることで、子どもの意識を「学習課題・めあて」の設定につなげていくようにしましょう。

<問いをもつ視点>

- 「分かっていること・問われていること」
- 「気が付いたこと」
- 「考えられること」
- 「疑問に思うこと」
- 「これまでに学んだこととの違い」
- 「調べてみたいこと」 等

- 「問いの共有」とは、各自がもった「問い」を基に、どのように問題を解決していけばよいのかを確認していく活動です。子どもが「学習課題・めあて」を明確に意識できるようにするために、ここでの活動が重要です。

- ・ どんな方法で解決できそうか、ペアやグループ、学級全体などで共有し、全員が自力解決の見通しを立てることができるようにします。
- ・ 問いを確認し合ったり予想を出し合ったりする場面を設定することで、学力に課題のある子どもも友達からヒントを得て、自力解決への見通しをもつことができます。

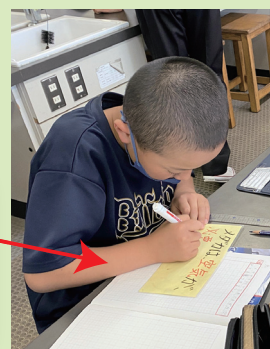
<問いの共有の方法>

- 友達のもった問いを聞く
- 板書に書かれた友達の問いを見る
- 解き方やおよその答えなどを教え合ったり、確認し合ったりする



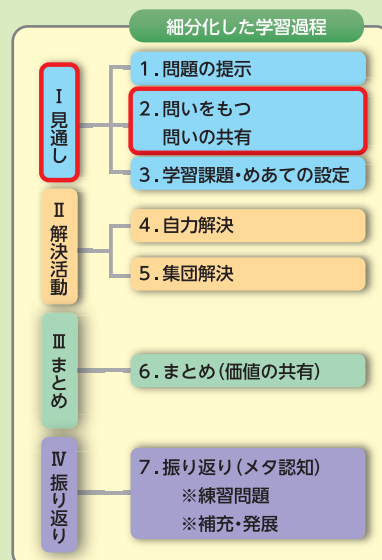
問題を見て、出てきた問いを友達と話しています。

全体で共有するために、問題を解決する方法を紙に書いています。



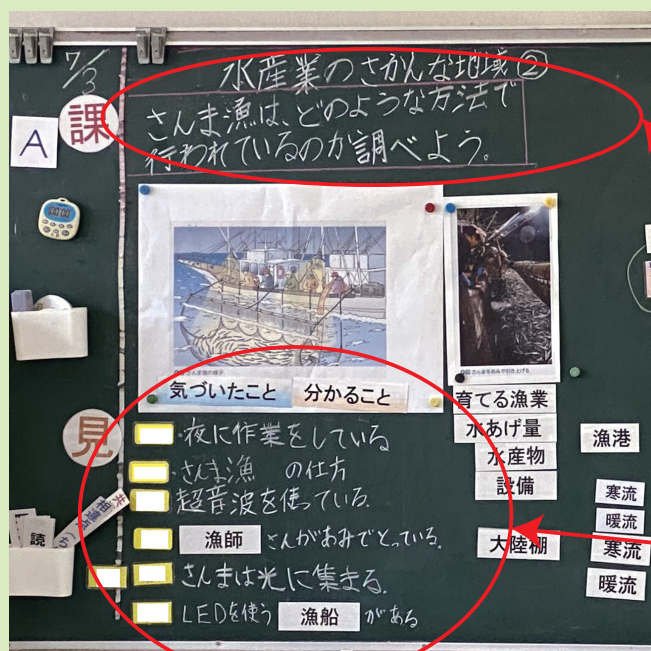
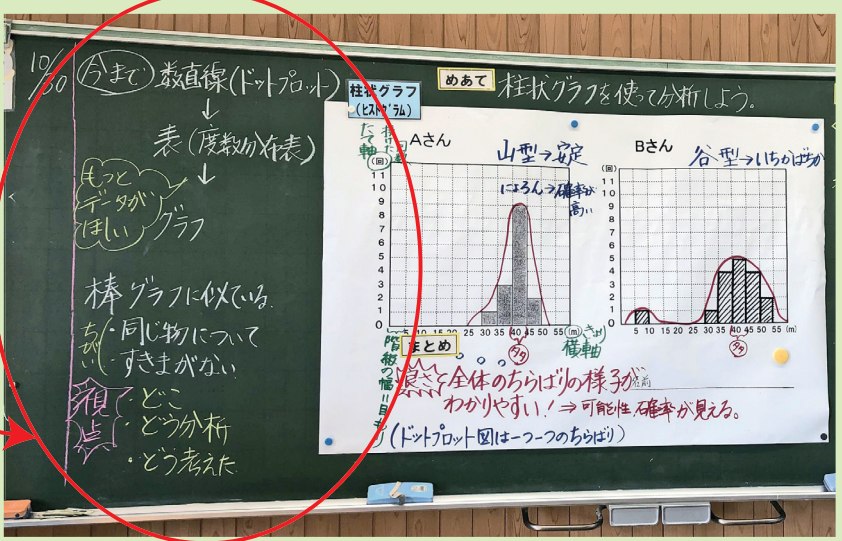
チェック

問題の提示後、すぐに自力解決に入っていないですか？問いをもたせずに、あるいは問いの共有を行わずに自力解決に入ると、何をすればよいか分からない子どもが出てしまいます。子どもの問いを、全体で共有してから自力解決に入りましょう。



今までの学習の中で使えそうなことや、問題を解決する方法について、子どもの気づきやつぶやきを拾い、教員が板書しています。

視点を整理し、問いを共有することは、この後の自力解決の見通しをもつための手立てになります。



子どもの問いを生かして、「学習課題・めあて」の設定につなげています。

提示された問題について、気付いたことや分かることを子ども自身がキーワードを使って示しています。

「問い」を「学習課題・めあて」の設定につなげるには

<子どもの発言を生かす>

「ということは、今日の課題は、どんな課題にしたらいいですか?」、「みんなの言葉を整理すると、今日の課題は〇〇ということになるけれど、どうですか?」等の言葉で、子どもの「問い」を「学習課題・めあて」につなげていくことができます。

チェック

子どもの言葉をどのように拾っていますか? 子どものつぶやきには、驚きや問いが表れています。子どものつぶやきも生かしながら、「学習課題・めあて」の設定につなげていきましょう。

3. 「学習課題・めあて」の設定

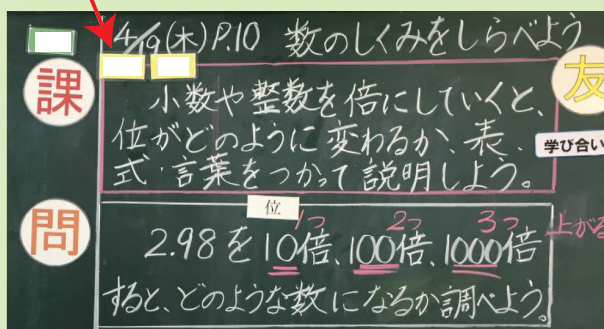
- 「学習課題・めあて」の設定は、本時で身に付けるべき力を育成するために、子ども自身が、今日の学習で「何が・どのようにできればいいのか」、「何が分かればよいのか」等のゴールイメージをもちながら学習できるようにするためのものです。
- ・ 「学習課題・めあて」は、「問いの共有」で出された子どもの発言を受けて設定することで、課題が子どもたち自身のものになります。
- ・ 子どもにとって分かりやすい具体的な言葉で設定しましょう。
- ・ 「学習課題・めあて」を教員が設定する場合がありますが、子どもたちにとって解決したい課題、解決の必然性を感じる課題となるよう、発問等を工夫することが大切です。
- ・ 「学習課題・めあて」を子ども自身のものにするために、声に出して読ませることも有効です。学習に向かうリズムをつかんだり、学習への参画を促したりする手立てにもなります。



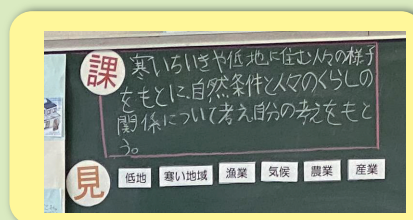
「学習課題・めあて」の例

- 「～を使って…ができる」
 - 「～をして、…について説明しよう」
 - 「なぜ、～は、…になるのだろうか？」
- × 「読書感想文を書こう」 → ○ 「登場人物と自分の経験を比べて読書感想文を書こう」等

出てきた問いを教員が整理し、「学習課題・めあて」として板書しています。



子どもが自分たちで「学習課題・めあて」を設定することもあります。



チェック

「学習課題・めあて」を子どもに提示するタイミングは授業の始めとは限りません。授業の中盤で示すこともありますが、ユニバーサルデザインの視点から「問題」、「学習課題・めあて」は、いつも板書の決まった位置に示しましょう。

自力解決に向かうために

<学習の流れの確認>

- ・本時の学習課題・めあての達成に向けて、子どもたちが見通しをもちながら主体的に活動できるようにするために、1単位時間の学習の流れを示して確認しましょう。

<見通しの確認>

- ・全員が自力解決の見通しをもっているかを確認しましょう。（自力で解決できそうかハンドサインで示させる等）
- ・見通しをもっていない子どもがいる場合には、前時までのノートを振り返らせたり、教え合いの時間を設けたりする等の手立てを行い、全員が自力解決に向かえるようにしましょう。

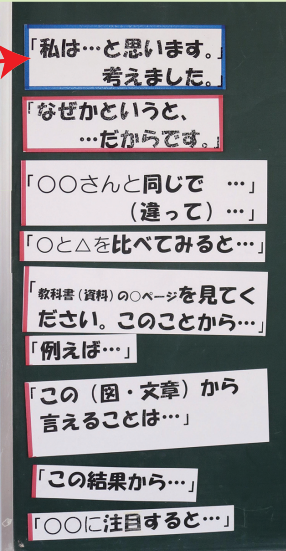
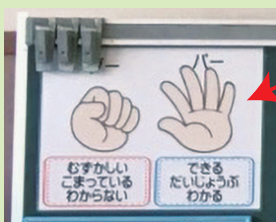
今日の流れ

ふり返し	
見通し	
自力解決	8分
グループ学習	5分
全体学習	15分
まとめ	3分
練習問題	3分
ふり返し	4分

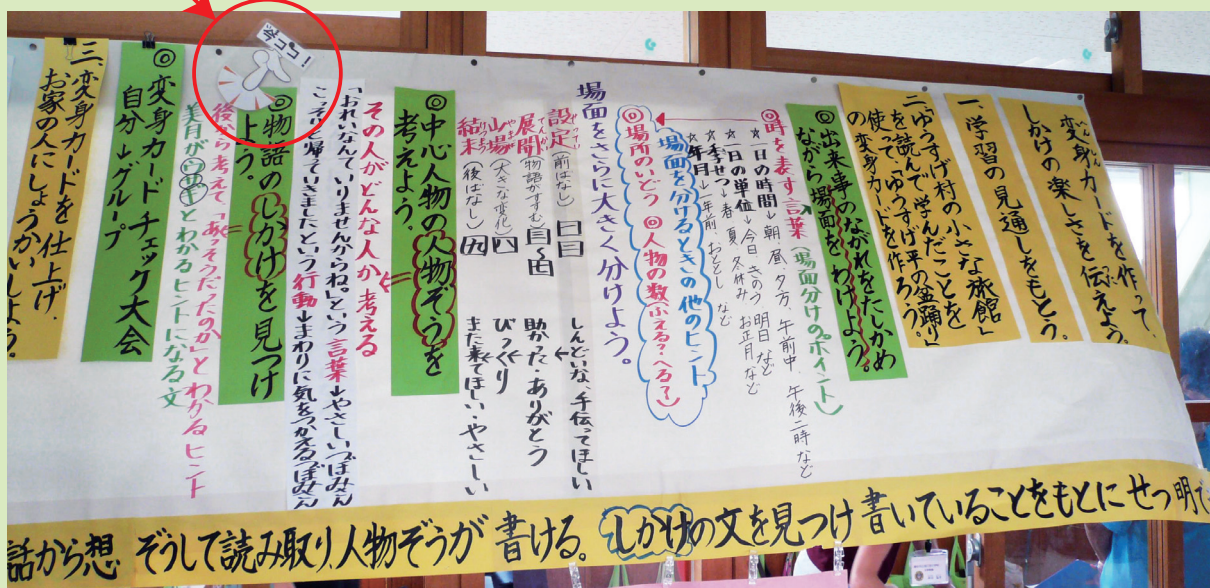
1単位時間の学習の流れを示すことで、子どもが見通しをもって学習に取り組むことができるようにしています。

身に付けさせたい言語能力を話型として提示しています。

自力解決できそうか、確認できるようにハンドサインを掲示しています。



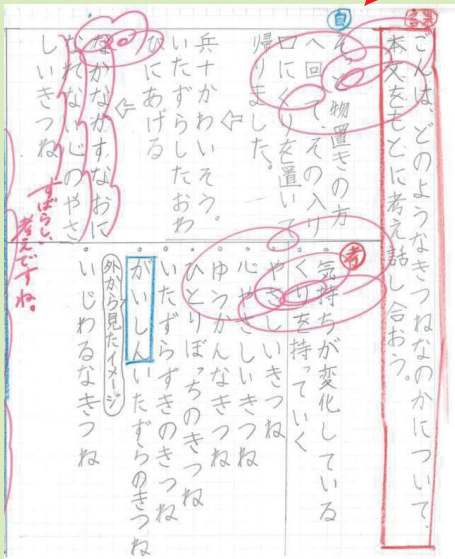
単元全体での本時の位置付けなども確認しておく、「今日の学習が単元を通して身に付ける力とどうつながるのか」、「何のために今日の学習を行うのか」等が明らかになり、子どもが目的意識をもちながらより主体的に学習に取り組むことにつながります。



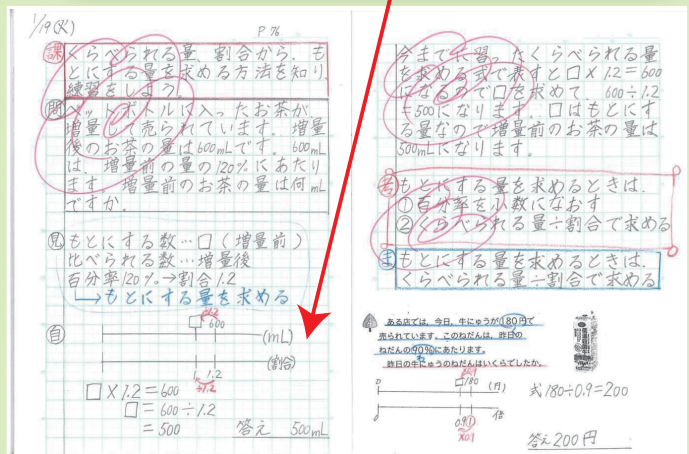
II 解決活動

4. 自力解決

- 「自力解決」とは、本時の「学習課題・めあて」に対して、子ども一人一人が個人で解決に向かう活動です。
- ・ スムーズな自力解決ができるよう「どのように進めていけばよいのか」手順や方法を子どもに伝えます。
- ・ 次の「集団解決」へと展開できるようにするために、ノート等に自分の考えを書かせます。発達段階や内容に応じて十分に思考ができる時間を設定しましょう。

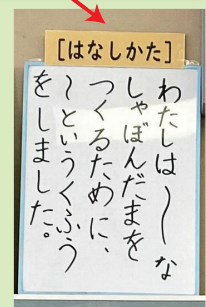
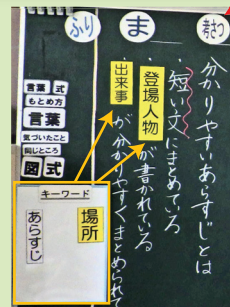


式や答えだけでなく、考えの根拠や理由を図や言葉等を使って書いています。



これまでの学習や本時の課題解決に関連するキーワード(学習用語)を提示し、自力解決のヒントとなるようにしています。

自力解決でタブレット端末を使用しています。思考ツールを用いることで自分の思考を整理しながら学習を進めています。



チェック

子どもの手が止まっていますか? 次ページにある個別の手立てで解決できそうにないときは、指導を見直しましょう。発問は分かりやすかったか、見通しや手順が明確だったか等、指導を振り返り、つまづいているところを把握し、明確な指示や具体的な方法を示すといった修正をしましょう。

机間指導

机間指導は、教員にとって子どもの学びの状況を確認したり、次の授業展開の構想を練ったりする重要な時間です。

机間指導を行う際は、**本時の学習のねらいに基づく学習活動の意図や到達点**を教員がしっかりとっておくことが大切です。ねらいを明確に意識することで、ねらいに沿った見取りと支援ができ、次の展開に生かすことができます。

<個の思考の過程を見取る>

- 赤ペンで子どもの考えのよい所に丸や花丸、アンダーラインなどを書きながら、認めたり褒めたりする。
- 「なぜそう思ったのか」、「具体的に言うと、どういうことか」、「まとめると、どういうことか」等、子どもの思考を広げたり、焦点化させたりするような声掛けをする。

<全体の学習状況を見取る>

- 課題への反応・理解等について、全体の傾向を把握する。十分でない場合は、補足の説明等を行う。
- 子どもの思考のパターンを見取り、集団解決で取り上げる意見を決める。(座席表に記入しておく)
- 次の学習展開を構想する。

自力解決が進んでいない子どもへの手立て

自力解決では、自分なりに思考したり、表現したりすることに意味があります。自分なりの考えをもつことで、この後の集団解決で友達の考えと比べながら聞くことができ、学習を深めることにつながります。

そのため、自力解決が進んでいない子どもには、机間指導の早い段階で支援を行い、自分の考えをもつことができるようにします。

困っている子どもには分かっている子どもが教える場を設ける等、子どもたち同士の**学び合いを大切にしましょう。**

<自力解決での支援>

- 個別の支援を行う
- キーワードを提示する
- ヒントカードを提示する
- これまでの学習を振り返らせる
- 友達の考え方を聞きに行かせる
- 友達のノートを見に行かせる 等



思考を深める声掛け



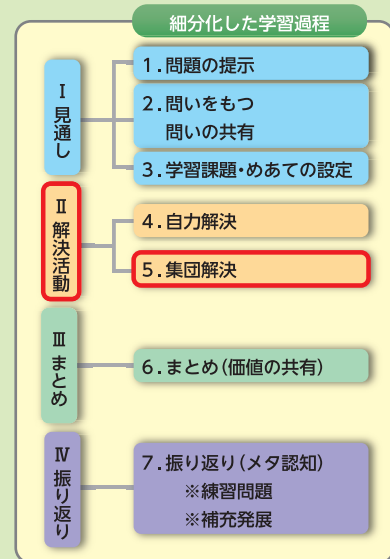
自力解決につまずいている子どもがいる場合には、友達に聞いたり、友達のノートやタブレット端末を見せてもらったりする場を設定することも大きな支援になります。

チェック

授業づくりとしての視点の他に、学級づくりの視点で机間指導を行うことがあります。「学習が苦手な子どもが自信をもって発表できるように」、「不安傾向にある子どもに先に声を掛け安心させるために」といった、子どもたちの安心感や帰属感が高まるような支援をしていくことも大切です。

5. 集団解決

- 「集団解決」とは、「自力解決」で個人が考えたことや疑問に思ったこと、分からなかったことなどを出し合って友達と交流し、自分の考えを広げたり、深めたりする活動です。
- ・ 「ペア」、「グループ」、「学級全体」等の学習形態がありますが、どの学習形態で行うのかは本時の学習のねらいに合わせて選択し、意図をもって取り入れることが大切です。
- ・ 「活動の目的」や「手順」を理解させ、本時の学習課題・めあてを意識しながら主体的に活動できるようにします。

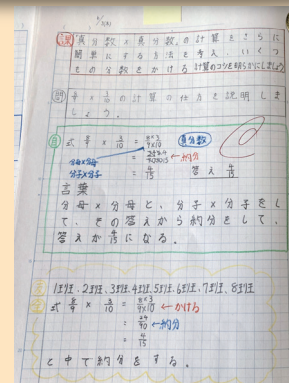


ペア活動

- 互いに考えたことを説明したり、相談したりする活動です。短時間で確かめ合ったり、伝え合ったりするときに行います。
- ・ 相手を見て考えを伝え合う。
- ・ 相手の意見を聞いて、「気付いたこと」、「自分の考えにはなかったこと」等をノートに記録する。
- ・ 相手の考えとの共通点や相違点を確認する。

等

友達の考えを記述し、自分の考えとの違いが分かるようにしている例です。



自分の考え

友達の考え

グループ活動

- 互いの考えや解決方法等について、共通点や相違点を確認し合う活動です。
- ・ 司会者や記録者などの役割をもたせ、スムーズに活動を進められるようにする。



グループで、ノートやホワイトボードを見せながら自分の考えを発表し合っています。

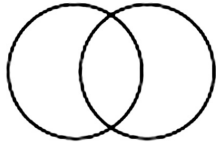
付箋に書き出して意見交流したり、思考ツールを用いたりすると、思考が可視化され、共通点、相違点、類似点等が見付けやすくなり、思考の深まりにつながります。



思考ツール

●様々な思考ツールを活用すると、考えを整理することができたり、互いの考えの共通点や相違点等を明らかにしたりすることができます。この他にも様々な方法がありますが、活用する際には、学習のねらいや目的に合わせて取り入れることが大切です。

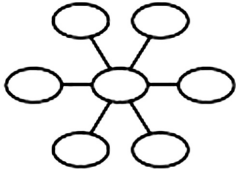
ベン図



<比較する・分類する>

二つのものを比べて、差異点や共通点を考えて、整理するとき役に立つ。

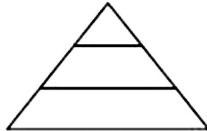
イメージマップ



<広げてみる>

頭の中のイメージを表に出してアイデアを広げるとき役に立つ。

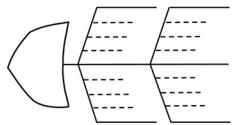
ピラミッド・チャート



<焦点化する・抽象化する>

多くの情報の中から、重要なものを絞り込むときに役立つ。

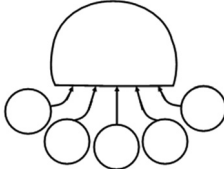
フィッシュボーン



<理由付ける・見通す>

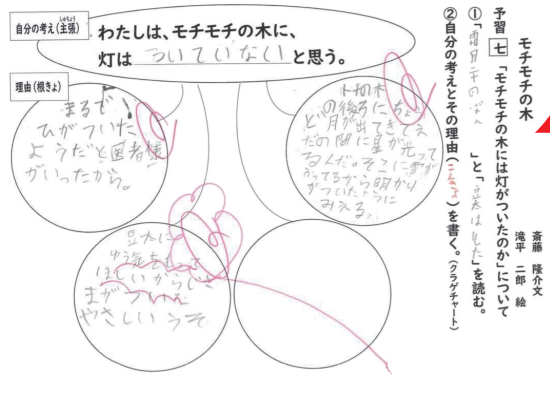
結果を生み出す要因を考え、どのように変えればよいか検討するとき役に立つ。

クラゲチャート



<理由付ける>

主張に対する論拠や根拠を見つけるとき役に立つ。



モチモチの木
高橋 隆介文
造平 二郎 絵

予習①「モチモチの木には灯がついたのか」について「理由(さ)のまへ」と「まへはした」を読む。

②自分の考えとその理由(さ)を書く。(クラゲチャート)

クラゲチャートを使って自分の考えの根拠を書かれています。

ホワイトボード

●個人やグループでまとめた意見をホワイトボードに書いて交流します。単に発表を聞かせるだけでなく、意見交流を仕組むことで共通点や相違点に気付かせ、学習が深まるようにします。

- ・ 明瞭・正確・簡潔に発表させる。
- ・ 共通点、相違点、自分の考えとの比較等の視点をもたせる。
- ・ 気付きを促すために、まず、貼り出したボードを眺めさせる方法などもある。

出された考えを黒板に貼り出して眺めさせ、共通点・相違点等に気付かせています。



全体での練り上げ（考察）

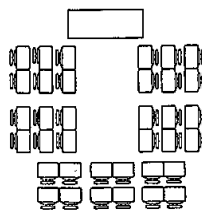
●個人やグループでの意見を学級全体で交流することで、さらに考えを深め、本時の学習課題・めあての達成に向かう活動です。

- ・共通点や相違点、類似点等を見付けさせたり、意見をつなげさせたりしながら、子ども主体に活動できるようにする。
- ・子どもの意見は、教員が板書し、構造的な板書になるようにする。
- ・話し合いがしやすいように机の配置を工夫する。
- ・教員対子どもにならないよう、教員の立ち位置等を工夫する。

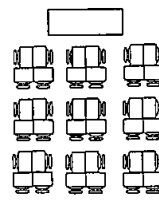


机配置の例

<全体での話し合い>



<グループでの話し合い>



発表の仕方

●子どもが発表するときには、自分の立場を明確にした発表が行えるようにします。そうすることによって、他者と自分の考えの違いを意識することになり、考えがより明らかになります。

- ・「賛成なのか」、「反対なのか」、「どこが同じで、どこが違うのか」等の視点で意見を述べる。
- ・教員対子どもの構図にならないように、聞き手の方を向いて発表する。

聞き方（反応）

●よりよい集団解決を行うためには、「聞き手の反応」が大切な要素になります。反応は、聞き手が授業に参加する意識を高めることにもつながります。

- ・友達の意見を聞くときには、自分の考えと「同じところ」や「違うところ」を明らかにする等の視点をもって聞く。
- ・うなずく等の反応をし、相手に「聞いていますよ」というメッセージを送る。

教員による修正

●話し合いの方向が本時の学習課題・めあてからそれている場合には、教員による修正が必要です。

- ・本時の学習課題・めあてとの整合性を確認させたり、切り返しの発問をしたりすることで、子どもに気付かせる。等



チェック

教員が主導となるのではなく、教員はコーディネーター役となりましょう。子ども同士の考えを生かしたり、つなげたりします。子どもたちの意見を価値付けながら、本時のねらいが達成できるようにコーディネートしましょう。

話し合いで使う言葉

- 自分の考えを豊かに表現できるようにするために、子どもたちの語彙を増やすことが大切です。学校で話型を統一したり、子どもたちの発表から生まれた言葉を掲示したりして、活用できるようにしましょう。
- ・自分の考えを端的に分かりやすく伝える話し方を教える。（結論→根拠や理由を述べる等）
- ・学習指導要領解説国語編「話すこと・聞くこと」の指導事項等を参考に、各学年に応じた「話す・聞く」能力を育成する。

自分の考えを話すコツ

使ってみよう	基本
「この資料（図・文章から）言えることは・・・」	「私は・・・と思います。（考えました） なぜかという点・・・だからです。」
「〇〇さんと同じで（違って）・・・」	「〇〇さんと同じで（違って）・・・」
「〇〇〇に注目すると・・・」	「〇〇〇に注目すると・・・」
「教科書（資料）の〇〇ページを見てください。」	「教科書（資料）の〇〇ページを見てください。」
「このことから・・・」	「このことから・・・」
「この結果が・・・」	「この結果が・・・」

根拠 理由 意見

話し方名人かきくけこ

- か かんがえや思いを話そう。
- き 人の方を見て話そう。
- く 手を大きくあけて話そう。
- け つろんやよう点を話そう。
- こ えの大きさを考えて話そう。

聞き方名人あいうえお

- あ いてを見ながら聞こう。
- い いしせいで聞こう。
- う なずきながら聞こう。
- え 顔で聞こう。
- え わりまで聞こう。

話し方のルール

- 話したいときは手をあげる。
- 指名されてから話す。
- 聞いている人の方を向いて話す。

聞き方のルール

- 目と耳と心で聞く。
- 最後までだまって聞く。

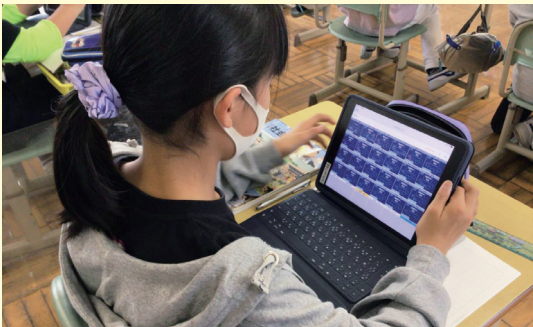
算数用語

100のまとまり
10を□にあつめた数は□
いくつ分

言葉のつづきに「ます」「に」。

ICT機器の活用

- 電子黒板、実物投影機、タブレット端末等のICT機器を活用することで、子ども一人一人の意見や思考過程を可視化することができます。また、解決方法を全体で共有したり、比較・分類したりすることもできます。



ICTの効果的な活用に関する事例が掲載されているHPを紹介します。授業づくりの参考にしましょう。

<p>「各教科等の指導におけるICTの効果的な活用に関する解説動画」 文部科学省</p>	<p>「StuDX Style（スタディーエクススタイル）」 文部科学省</p>	<p>「Google for Education ICT活用に関するリンク集」 Google合同会社</p>
--	--	--

Ⅲ まとめ

6. まとめ（価値の共有）

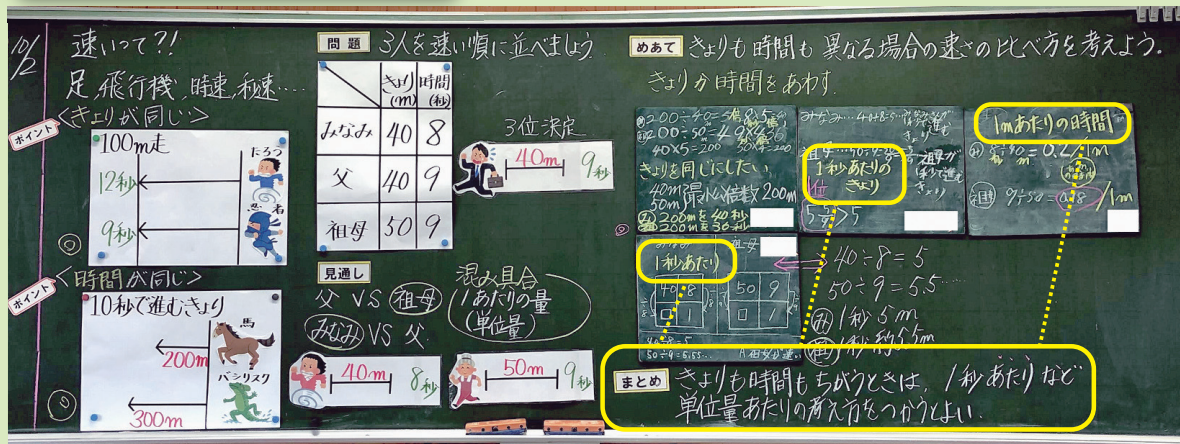
● 「まとめ」とは、学級全体で練り上げ（考察）を行った後、本時の「学習課題・めあて」に対するまとめを行う活動です。本時の「学習課題・めあて」と「まとめ」は、「問いと答え」の関係になります。

* 「めあて」と「まとめ」の整合性を図る。

・ 教員の言葉でなく、子どもから出た言葉でまとめられるよう支援をしましょう。（「まとめの書き出しの言葉」や「キーワード」を提示するとよい）

* ただし、学習上押さえるべきポイントは、しっかりと押さえること。

・ 数人の子どもにまとめを発表させ、その意見を聞いて、さらにまとめを発表させて深める「まとめのまとめ」のような方法もあります。



IV 振り返り

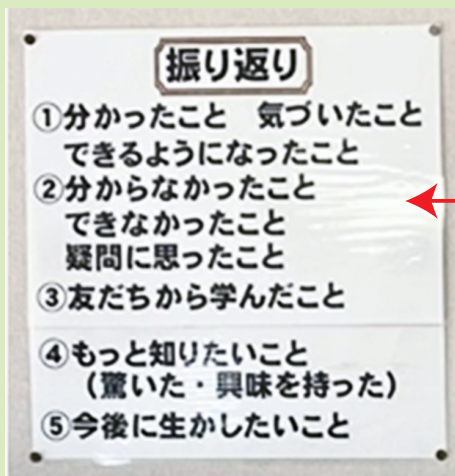
7. 振り返り

● 「振り返り」をすることは、今日の授業における自分の学びや成長への気づきを促すことになり、より深い学びへとつながります。また、自己の学習への充実感が得られ、学習意欲の向上へとつながります。

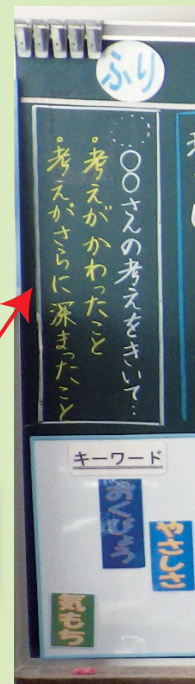
- ・ 視点を明確にして振り返らせることが大切です。
- ・ 自分の言葉で振り返りをノート等にしっかりと書かせましょう。
* 「キーワードを使って書く」等の条件を与えて書かせることで、思考力・判断力・表現力等の育成にもつながります。
- ・ 自分の振り返りを隣の人に伝える場等を設けると、全員が、今日学んだことをしっかりと認識できるようになります。

<振り返りの視点>

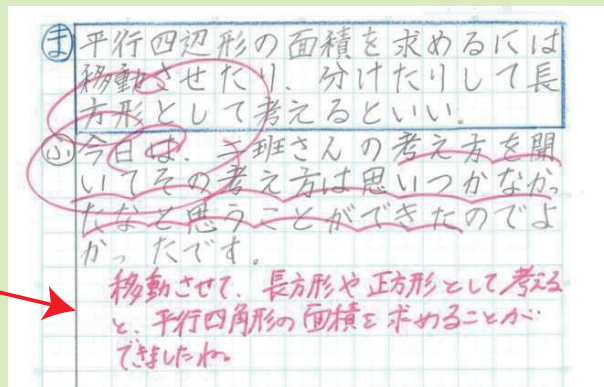
- 「今日のみあてを達成できたか」、「何ができるようになったか」
(学習課題についての自己の学びの視点)
- 「友達の考えから学んだこと」
(対話的な学びの視点)
- 「新たな疑問ややってみようこと」
(主体的な学び・次の学びにつなげる視点) 等



振り返りをしやすいように、視点を黒板などに提示し、ノートに書かせています。



子どもの振り返りに教員がコメントを入れることで、次の学習への意欲を高めることができます。



チェック

振り返りが、「〇〇をして楽しかった。」といった感想になっていませんか？振り返りを通して、子どもが自らの学びや課題を自覚することが大切です。本時のめあてと関連付け、どんなことを書かせたいのかを具体的に考え、視点を示していきましょう。

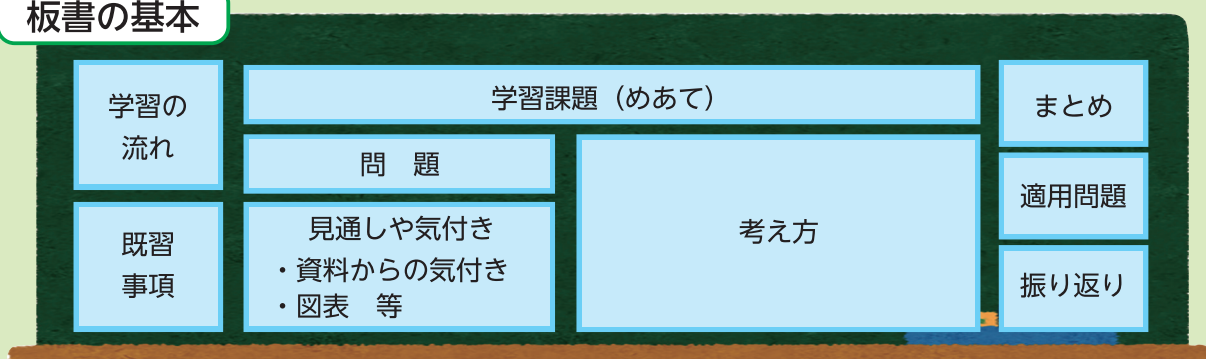
板書

●板書は、1単位時間の授業における子どもたちの思考の足跡です。授業の流れが分かるよう、構造的な板書を目指しましょう。

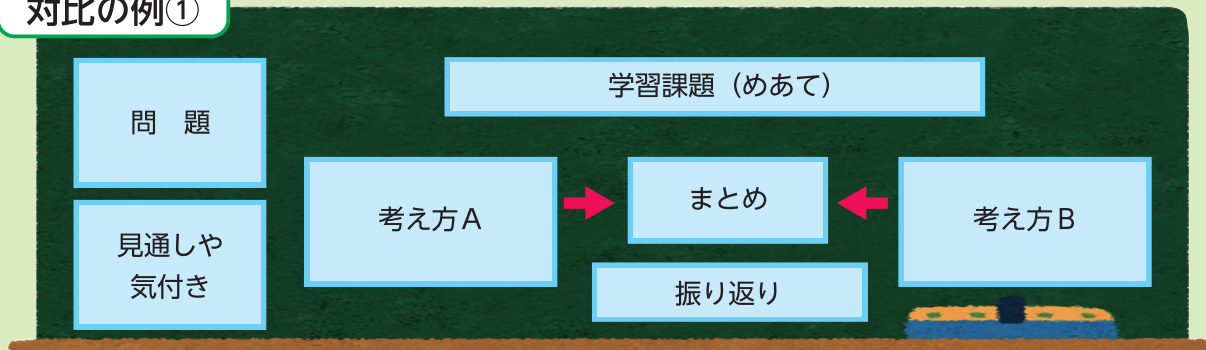
ポイント

- ・「学習課題・めあて」は色チョーク、「問題」は白で囲むなど、ルールを決めておく。
- ・文字の大きさ、チョークの色、線の太さなど、それぞれの意図や効果を考える。
- ・子どもたちの意見や考えが残る板書にする。
- ・子ども参加型の板書（子どもが黒板に書いたり、板書を使って説明したりする等）にする。

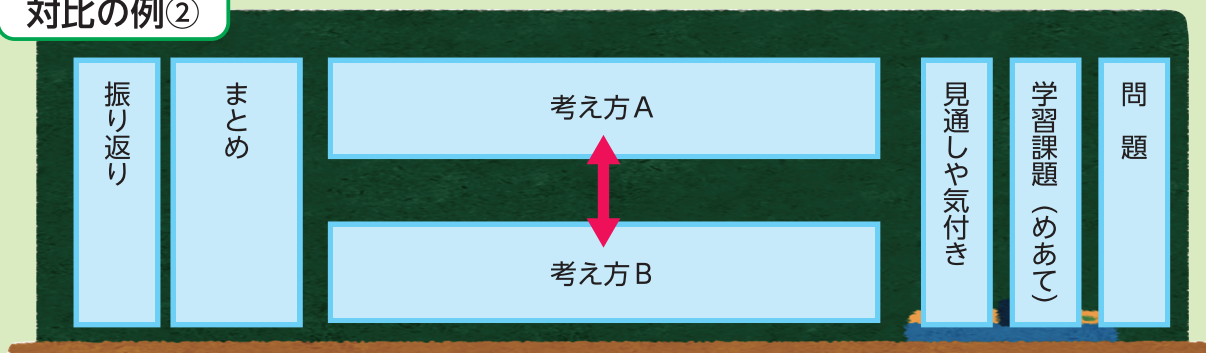
板書の基本



対比の例①



対比の例②

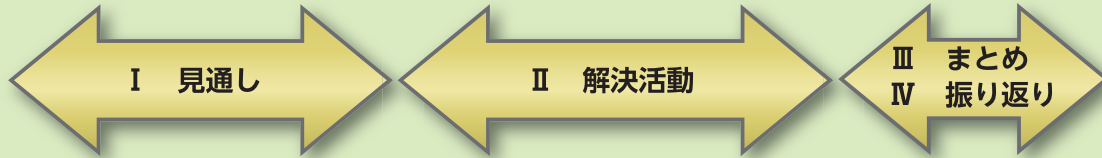
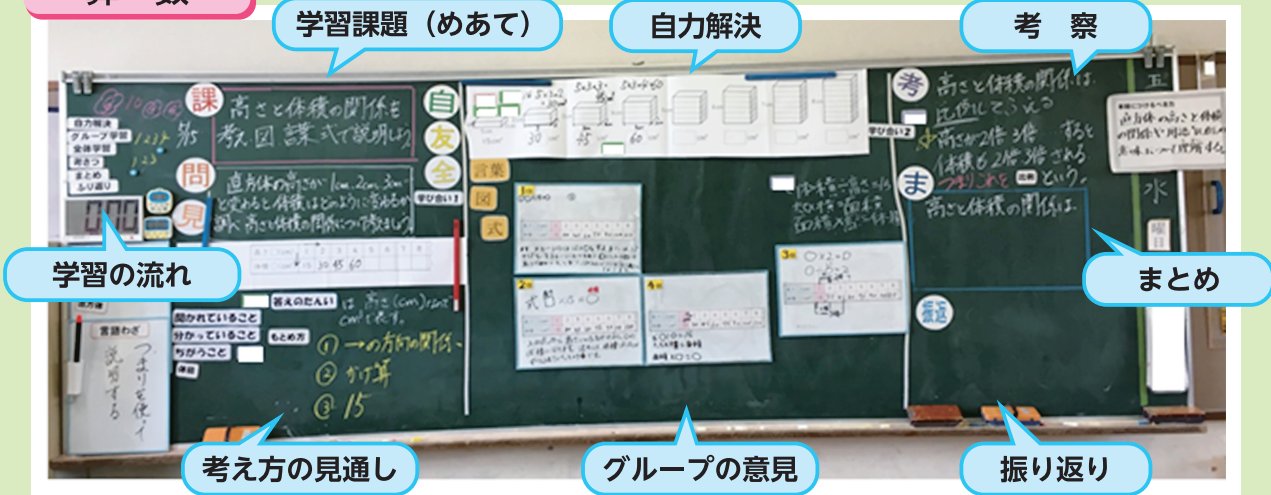


チェック

黒板に書いたものを授業中に何度も消していませんか？授業の流れや思考の流れを可視化していくことで子どもの考えが整理され、思考の助けとなっていきます。板書の基本を押さえ、すっきりした板書を目指しましょう。

1単位時間の学習過程（P11の細分化した学習過程）に沿った板書になっています。

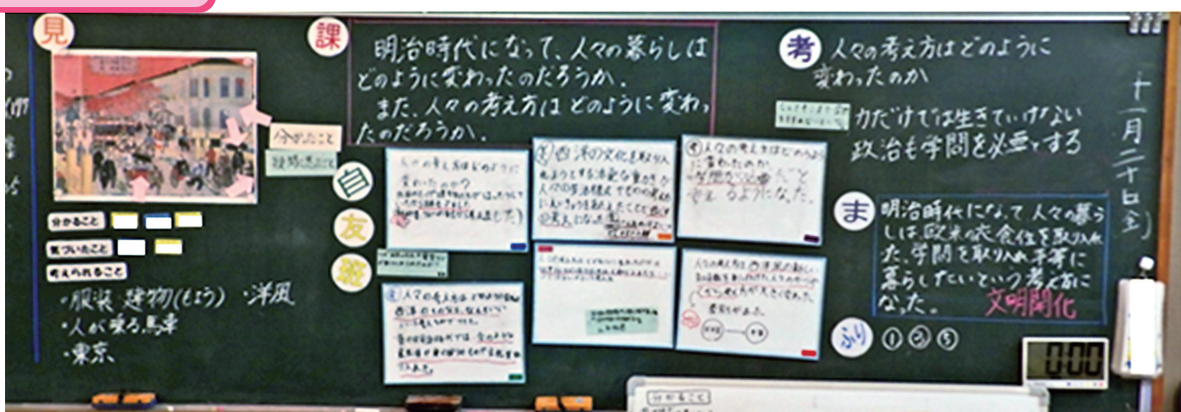
算 数



国 語



社 会



ノートづくり

●ノートは、子どもたちの大事な思考の場です。板書を写すだけでなく、自分の考えを書いて整理したり、友達の意見を書いたりし、自分だけのノートになるように指導しましょう。

ポイント

- ・「学習課題・めあて」や「振り返り」を書く枠線の色を板書と対応させる等、ノートづくりのルールを決めておく。

1 単位時間のノート

学習課題（めあて）

日付

問題

見通し

自力解決

考察

振り返り

まとめ

適用問題

自力解決では、数直線、式、言葉で考えを表しています。

矢印や吹き出しを使って自分だけのノートをつくっています。

自力解決

教員が価値付けたコメントを入れています。

学習課題（めあて）

振り返り

まとめ

考察

チェック

「先生、書きますか？」という指示を待っている子どもの様子が見られませんか？先生の書いたことを写すだけのノートから自分の考えが残るノートになるよう段階的に指導し、子ども自身が学びを振り返ることができるノートづくりを目指しましょう。

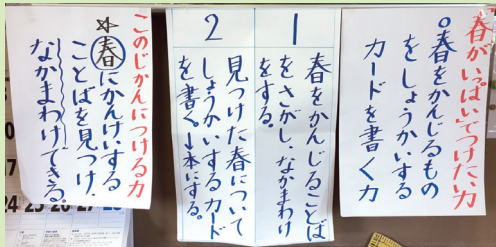
初任者の先生からよくある質問 Q&A



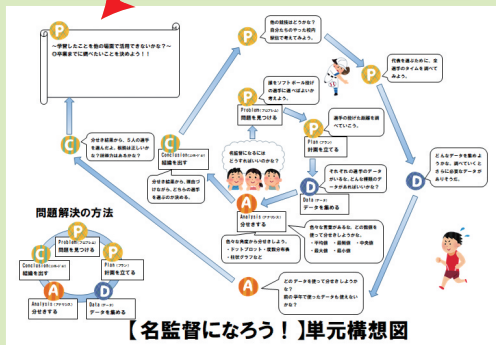
Q 単元を通した指導が必要なのは分かりましたが、子どもに単元の見通しをもたせる方法がありますか？



A 単元ゴールのイメージや各時間とのつながりを意識できるような工夫が必要です。単元の見通しやその単元で身に付けさせたい力を子どもに示し、共有しましょう。



他教科との関連を示した単元構想図



単元計画を知らせるとともに、自己評価や毎時間の振り返りができるようにしています。

美術科 第3学年 振り返りシート

水墨画風表現

3年 番 名前

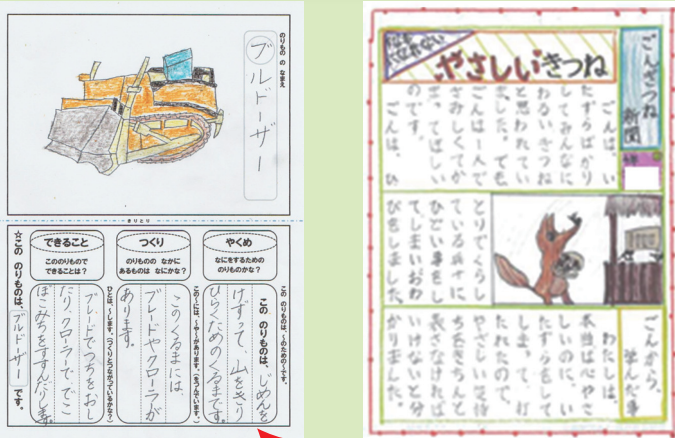
日付	自分の課題や計画	満足	集中	授業を振り返って (思ったこと・考えたこと等)
✓	水墨画について 墨の濃淡や線の描き方で表現できるものを知る。	4 3 2 1	4 3 2 1	
✓	発想 主題を決める。	4 3 2 1	4 3 2 1	
✓	構想 構図を考える。	4 3 2 1	4 3 2 1	
✓	制作① 表したいことに合わせて表現を工夫する。	4 3 2 1	4 3 2 1	
✓	制作② 表したいことに合わせて表現を工夫する。	4 3 2 1	4 3 2 1	
✓	相互鑑賞	4 3 2 1	4 3 2 1	

単元で付けたい力

単元のめあて

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
新見南青の他の作品を鑑賞し、感想を書き、全学年で発表する。	話し合ったことをもとに、考えたことを発表する。	学習したことを使って、物語をあらためる話し合いをする。	よに美化したのが、考えをまとめる。	これまでの読みを振り返り、みんなの気持ちをよに表現して考え、話し合う。	物語について考え、話し合う。	①の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。	②の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。	③の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。	④の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。	⑤の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。	⑥の場面を鑑賞し、長十郎の動きを観たい。
平行読書	自分の考え	中心人物	比べ鑑賞	あらすじ	変化	行動・気持ち	変化	行動・気持ち	変化	行動・気持ち	人物像
						10/29	10/25	10/24	10/23	10/23	10/15

学習した日付を書くことで、単元の中での本時の位置を確認しています。単元計画は、ノートに貼ったり、教室に掲示したりと、子どもが意識できるようにしましょう。



単元の見通しをもたせる際に成果物の見本を示すことがあります。これまでの成果物を示す方法や教員が作成したものを示す方法等があります。視覚化することで具体的なイメージをもたせることができます。

Q 授業づくりで役立つツールや有効な教室掲示があれば教えてください。



A 県内の先生方の実践例をいくつか紹介します。皆さんの校内にも経験豊富な先生方がいらっしゃいます。放課後に教室をのぞかせてもらうことも勉強になります。

学習のルール

授業で繰り返し使う用語等は、すぐに黒板に貼ることができるよう準備しておく、時間を有効に使うことができます。

基本的な学習のルールを徹底することは、授業のリズムをつくとともに、子どもたちが安心して学習に取り組むための環境づくりとしても大切です。

授業のアイテム

学び方のヒント

授業の中で使ってほしい考え方や用語を掲示しています。

子どもたちが見通しをもちながら学習を進めていくことが大切です。学習の手引きとなるものをノートに貼ったり、クリアファイルに綴じたりすることで、いつでも手元で学習の流れを確認できるようにしています。

学習したことを記入できるようにしておくことも有効です。

Q 黒板代わりにプロジェクターをよく使用しています。黒板は使わなくてよいですか？



A 効果的なICT活用は、学ぶ意欲の向上や理解の助けとなりますが、教員側から一方的にスライドを示し、説明するだけでは、主体的な学びにはなりません。また、板書に学びの足跡が残らないと、授業全体の振り返りができません。何を黒板に残すのかも合わせて授業計画を立てましょう。

本時の課題を示しても消えてしまうと、何について考えているのか子どもたちは分からなくなります。課題は、いつでも確認できるように提示しておきましょう。

子どもから出た意見や疑問を板書に残すことで思考の流れが分かります。



板書に書き切れない場合は、ホワイトボードや補助黒板を使いましょう。

Q ノート指導がうまくいきません。どのように指導すれば良いですか？



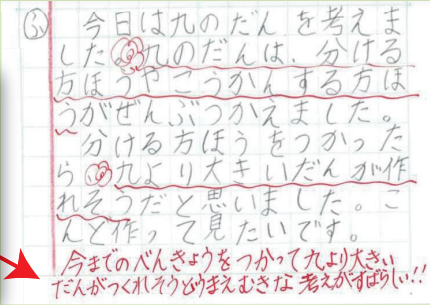
A ノート指導に役立つページが、教科書によっては、「マイノート」等として紹介されているので活用しましょう。よい見本となる子どものノートを掲示するのも有効です。評価コメントを入れると、子どもにとってノートづくりの参考になります。



学年別にノートを掲示しています。上級生のノートを見ることで、まとめ方のコツをつかむことができます。

小学校低学年は、丁寧にノートを書くことだけでも時間がかかります。発達段階に合わせてノート指導を進めていきましょう。

ノートづくりでも教員のコメントや価値付けは有効です。



参考文献等

*これらの資料等も授業づくりの際に参考にしてください。

【文部科学省作成資料】

- ・「小学校学習指導要領」（文部科学省 平成29年3月）
- ・「小学校学習指導要領解説総則編」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「小学校学習指導要領各教科等解説」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「中学校学習指導要領」（文部科学省 平成29年3月）
- ・「中学校学習指導要領解説総則編」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「中学校学習指導要領各教科等解説」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「高等学校学習指導要領」（文部科学省 平成21年3月、平成30年3月）
- ・「高等学校学習指導要領解説総則編」（文部科学省 平成21年7月、平成30年7月）
- ・「高等学校学習指導要領各教科等解説」（文部科学省 平成21、22年、平成30年7月）
- ・「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（小学校・中学校）」（国立教育政策研究所 令和2年3月）
- ・「評価標準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校）」（国立教育政策研究所 平成24年7月）
- ・「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校）」（国立教育政策研究所 令和3年8月）
- ・「全国学力・学習状況調査解説資料 小学校」（国立教育政策研究所）
- ・「全国学力・学習状況調査解説資料 中学校」（国立教育政策研究所）
- ・「生徒指導提要」（文部科学省 平成22年3月）

【高知県教育委員会作成資料】

- ・「高知県授業づくりBasicガイドブックー平成29年度改訂版ー」（高知県教育委員会 平成29年10月）
- ・「高知県授業づくりBasicガイドブックー高校授業編ー」（高知県教育委員会 平成30年3月）
- ・「若年教員研修のしおり 子どもと生きる」（高知県教育センター）
- ・「生徒指導ハンドブック」（高知県教育委員会 平成26年3月）
- ・「すべての子どもが『分かる』『できる』授業づくりガイドブック〔改訂版〕」（高知県教育委員会 令和3年3月）
- ・「第3期高知県教育振興基本計画 改訂版」（高知県教育委員会 令和3年3月）

【高知県教育委員会作成指導資料】

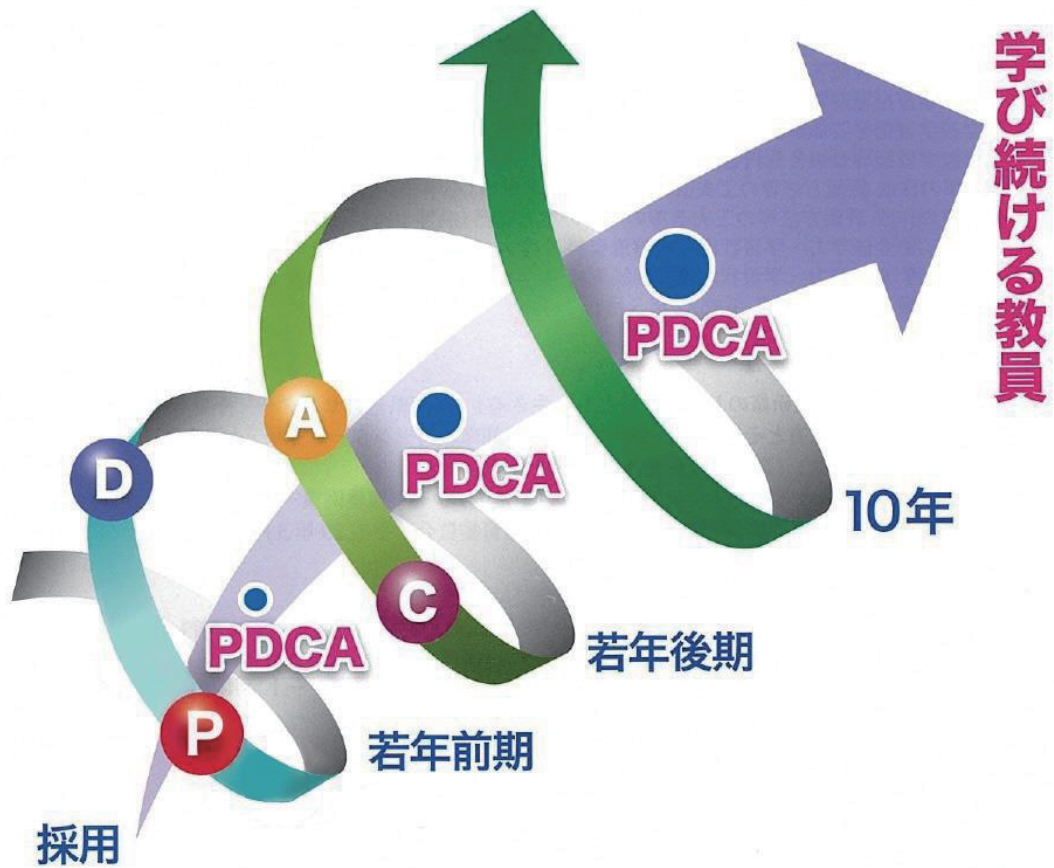
- ・全国学力・学習状況調査結果の概要
- ・高知県学力定着状況調査結果の概要
- ・高知県英語教育推進のためのガイドライン（改訂版）
- ・進めよう！高知のキャリア教育（Part1・Part2・Part3）
- ・高知県学校図書館活用実践事例集
- ・（改訂版）高知県学校図書館活動ガイドブック

《関係URL》

- ・高知県教育委員会 <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310000/>
- ・高知県教育センター <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/>
- ・高知県心の教育センター <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311902/>
- ・高知県教育委員会事務局小中学校課 <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/>
- ・高知県教育委員会事務局人権教育・児童生徒課 <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310801/>
- ・文部科学省 <https://www.mext.go.jp/>
- ・国立教育政策研究所 <https://www.nier.go.jp/>

《引用・参考文献等》

- ・「第3期高知県教育振興基本計画 改訂版」（高知県教育委員会 令和3年3月）
- ・「小学校学習指導要領」（文部科学省 平成29年3月）
- ・「小学校学習指導要領解説総則編」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「小学校学習指導要領各教科等解説」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「中学校学習指導要領」（文部科学省 平成29年3月）
- ・「中学校学習指導要領解説総則編」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「中学校学習指導要領各教科等解説」（文部科学省 平成29年7月）
- ・「生徒指導提要」（文部科学省 平成22年3月）
- ・「すべての子どもが『分かる』『できる』授業づくりガイドブック〔改訂版〕」（高知県教育委員会 令和3年3月）
- ・「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」田村 学・黒上 晴夫（小学館2013年8月）
- ・「新教育課程を活かす能力ベースの授業づくり」齊藤一弥・高知県教育委員会（ぎょうせい2019年3月）
- ・「今からできる！石堂流アクティブ・ラーニングのABC」石堂 裕・村川 雅弘（日本文教出版2016年3月）
- ・独立行政法人教職員支援機構>情報提供>アクティブ・ラーニングに関する情報>アクティブ・ラーニング研修プログラムモデル
>アクティブ・ラーニング授業実践事例>ピクトグラム一覧



5年後、10年後の自分の姿を想像し、
学び続けていきましょう。

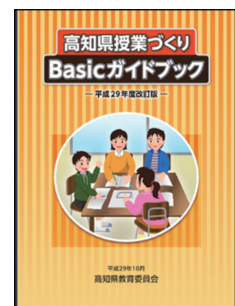


高知県授業づくり Basic ガイドブック ～若年教員の基礎・基本～

令和4年3月

本冊子は、平成27～30年度に高知県教育センター若年教員研修アドバイザーを務められた西留 安雄氏（現 東京都板橋区稚竹幼稚園長）のご協力のもと作成された右の冊子を踏まえて、若年教員用に編集しています。

＜編集・発行＞ 高知県教育センター
〒781-5103 高知市大津乙 181



「高知県授業づくり
Basicガイドブック
-平成29年度改訂版-」

高知県授業づくり
Basicガイドブック

氏名